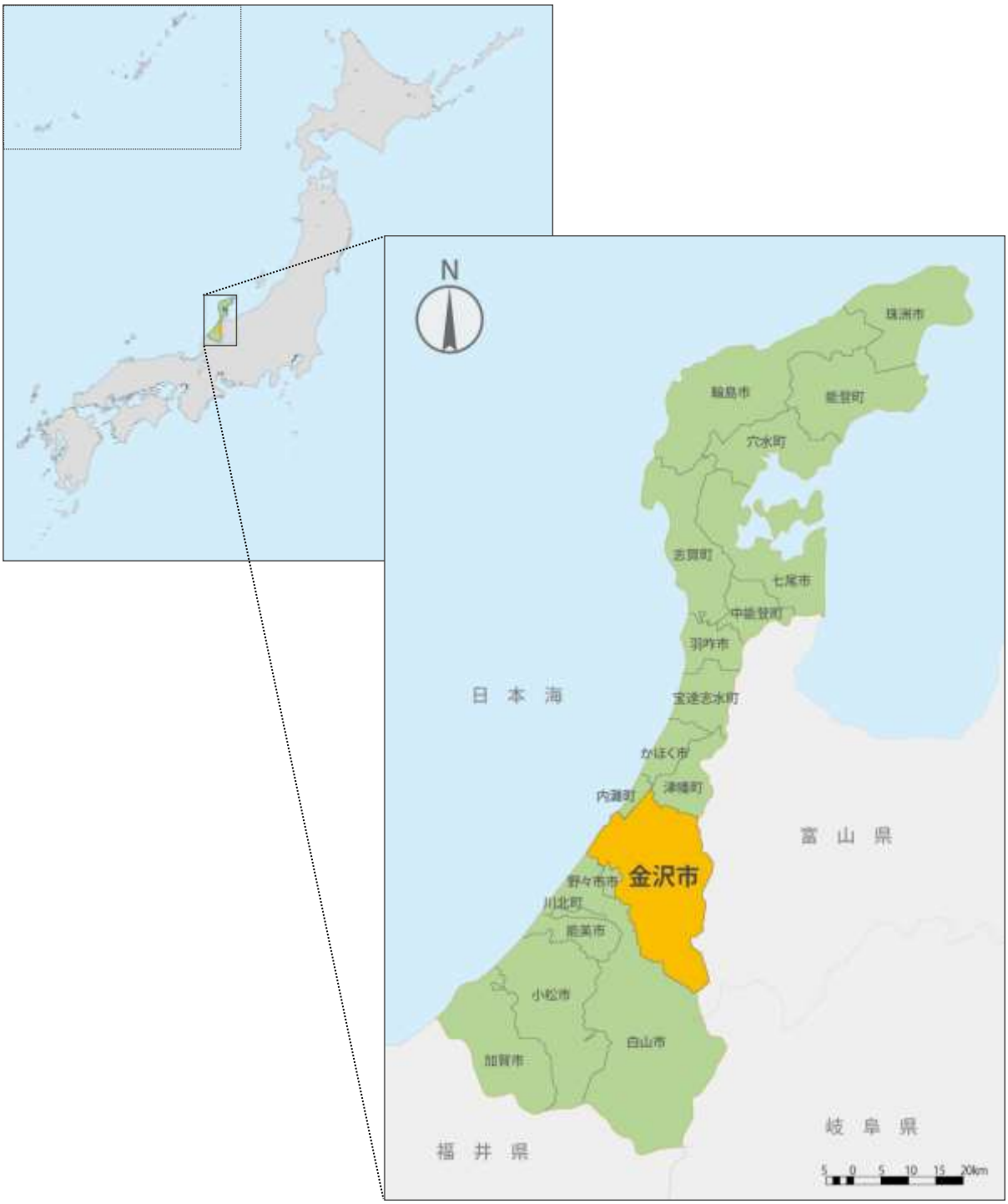
第１章　金沢の歴史的風致形成の背景

１．自然的環境

（１）位置

金沢市は石川県のほぼ中央に位置する県都であり、東は富山県境から西の日本海まで東西23.3km、南は白山山麓（さんろく）から北の河北潟（かほくがた）まで南北37.3kmの範囲にあり、面積は468.64km²である。



金沢市の位置

（２）地形・地質等

西は日本海に面した海岸の砂丘が北部の内灘砂丘に続き、東は奥医王（標高 939 m）、白兀山など医王の山並みがあり、南東の市内最高峰奈良岳（標高 1,644m）のほか奥三方山・大門山など標高 1,500mを超える山地とともに富山との県境を形成している。そして、これらの山地を水源とする犀川及び浅野川の二大水系が市域を３つに分けている。市の西部に展開する平野は、犀川を境として北部と南部に分かれており、北部の平野は犀川・浅野川・金腐川・森下川などによって運ばれた礫・砂泥・シルトなどで形成された沖積平野で、一般に低湿で傾斜も緩やかである。また、市北部には石川県内最大の湖沼である河北潟（4.13 ㎢）がある。これに対して、南部の平野は石川県内最長の河川である手取川が形成する扇状地の北東端部にあたり、北部の平野に比べて起伏が多く見られる。

このような自然地形を背景に金沢の中心市街地は、３つの丘陵・台地（卯辰山・小立野台地・寺町台地）と２つの河川（浅野川・犀川）で構成される変化に富んだ地形構造を有している。

中心市街地の地形略図

市全域の状況

寺町台地と小立野台地に代表される台地と卯辰山と野田山に代表される丘陵地、医王山、戸室山に代表される山地には豊かな緑が分布している。

小立野台地の先端部に位置する金沢城跡の旧本丸は、金沢大学の植物園として保護されていたため豊かな緑が残されており、スダジイや外来の珍しい樹木を見ることができる。

兼六園に隣接する本多の森公園の周辺は藩政期からの豊かな緑が分布しており、台地縁の緑は金沢の原植生を見せている。

小立野台地や寺町台地縁の斜面には豊かな緑が連続して残っており、都市内の緑の回廊を形成している。

金沢城跡の北東に位置する卯辰山一帯は市街地に接する自然豊かな丘陵で、その緑は兼六園の眺望台から遠望される。

野田山から見る金沢の市街地

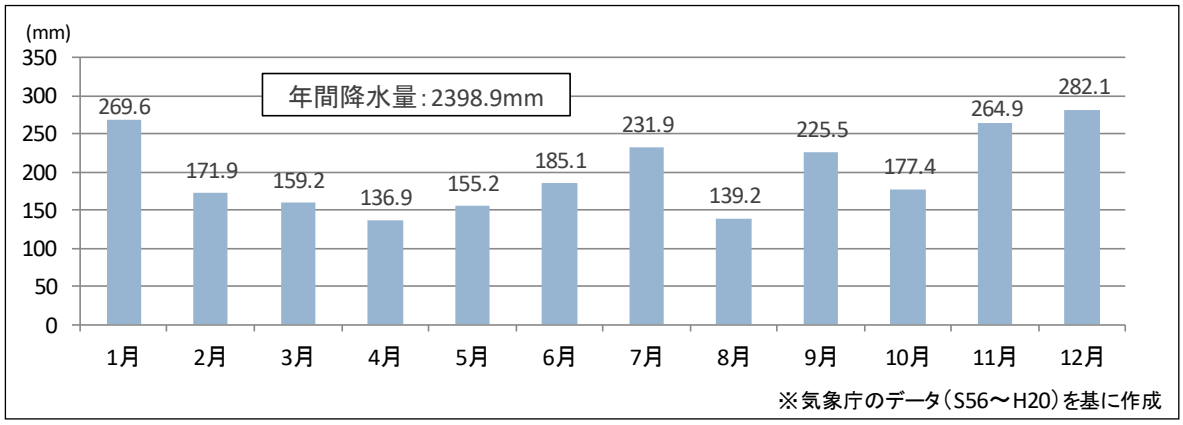
卯辰山から見る小立野台地の緑と山並み

加賀藩主前田家墓所を頂にして市民墓地となっている野田山は松が多く、一体で連なる大乗寺丘陵とともに市街地の背景をなす貴重な緑の山でもある。

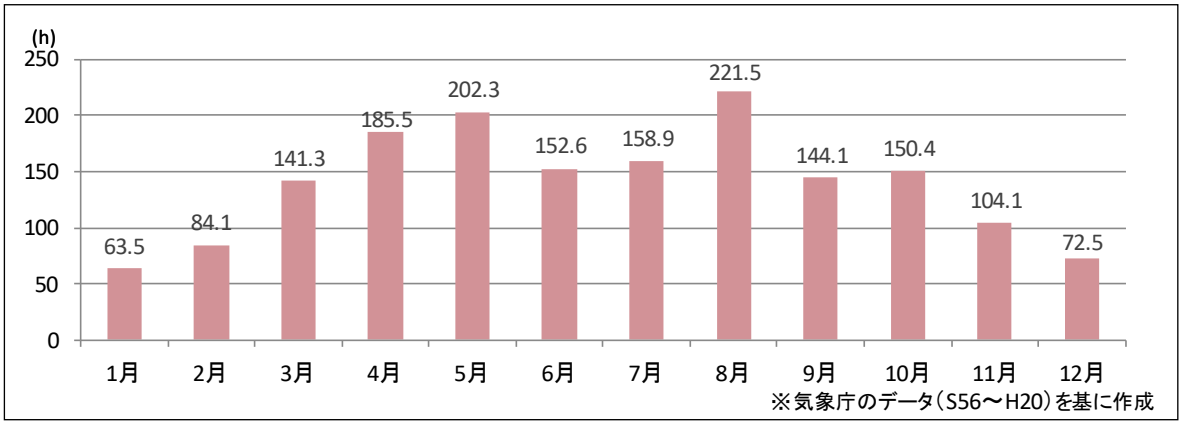
丘陵・台地の緑の分布

（３）気象

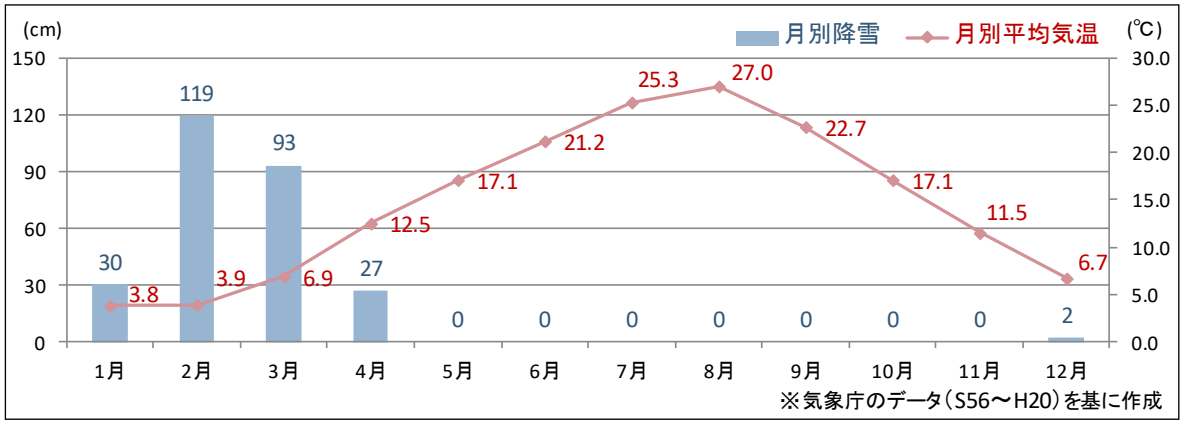
金沢は四季の変化が明確であり、その気候は日本海岸気候区に属し、年間降水量は全国有数である。日本海沖を流れる対馬海流により同緯度の周辺地域と比較して冬季の寒さが和らぐ一方で、その水蒸気が北西季節風によって運ばれ降雪がもたらされる。冬季は特に曇天の日が続き日照時間が少なく、湿潤で重い積雪がある。



月別降水量



月別日照時間

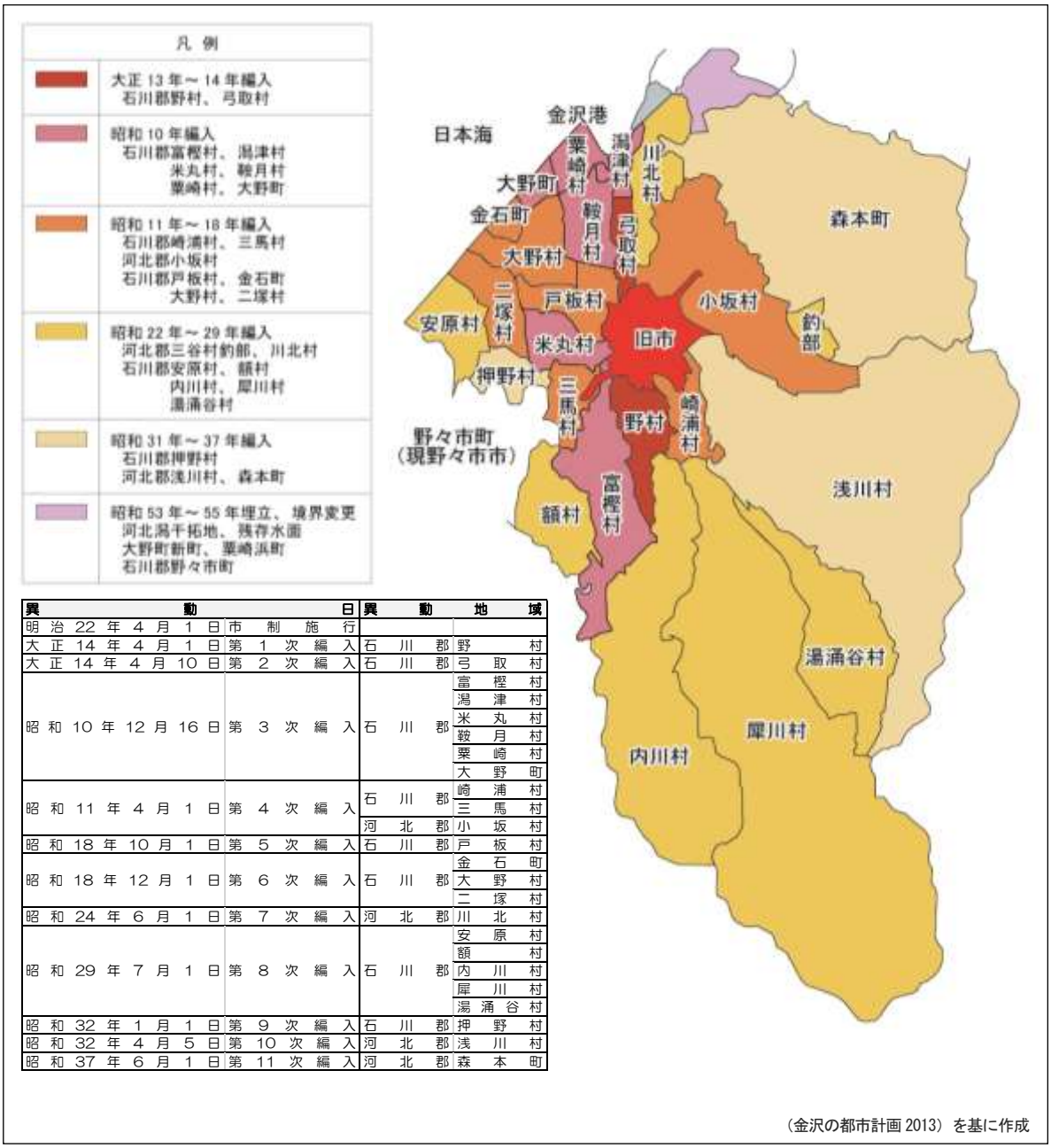


月別降雪・平均気温

２．社会的環境

（１）市の沿革

明治４年（1871）の廃藩後、金沢町となった。明治 22 年（1889）４月１日市制が施行され、県庁所在地として行政、文化、経済の中心として発展を続け、以下の図のとおり、大正 13 年(1924)以来 10 数次にわたる隣接町村との合併により市街地規模の拡張を図り、今日に至っている。



異動日	異動地域	
明治 22 年 4 月 1 日	市制施行	
大正 14 年 4 月 1 日	第 1 次編入	石川郡 野村
大正 14 年 4 月 10 日	第 2 次編入	石川郡 弓取村
昭和 10 年 12 月 16 日	第 3 次編入	石川郡 富樫村
		石川郡 湯津村
		石川郡 米丸村
		石川郡 鞍月村
		石川郡 粟崎村
		石川郡 大野町
昭和 11 年 4 月 1 日	第 4 次編入	石川郡 崎浦村
		石川郡 三馬村
		河北郡 小坂村
昭和 18 年 10 月 1 日	第 5 次編入	石川郡 戸板村
昭和 18 年 12 月 1 日	第 6 次編入	石川郡 金石町
		石川郡 大野村
		石川郡 二塚村
昭和 24 年 6 月 1 日	第 7 次編入	河北郡 川北村
昭和 29 年 7 月 1 日	第 8 次編入	石川郡 安原村
		石川郡 額村
		石川郡 内川村
		石川郡 犀川村
		石川郡 湯涌谷村
昭和 32 年 1 月 1 日	第 9 次編入	石川郡 押野村
昭和 32 年 4 月 5 日	第 10 次編入	河北郡 浅川村
昭和 37 年 6 月 1 日	第 11 次編入	河北郡 森本町

（金沢の都市計画 2013）を基に作成

金沢市の沿革

（２）土地利用

金沢の市街地には、浅野川と犀川（さいがわ）によって形成された河岸段丘が広がり、地形の高低差がつくる坂路（さかみち）や眺望のよい地形の縁など特徴的な場所が各所に見られる。

かつて城下の中心部を横断する基幹道であった北国街道は、現在、武蔵（むさし）が辻（つじ）～香林坊～片町といった金沢の都心軸の一部として、中心商業・業務地区を形成している。また市街地を南西から北東方向に連なる台地の縁には豊かな緑が残り、都市内の貴重な緑の回廊を形成している。

土地利用構成と主要な都市機能

土地利用状況の内訳　　（平成 27 年度時点）

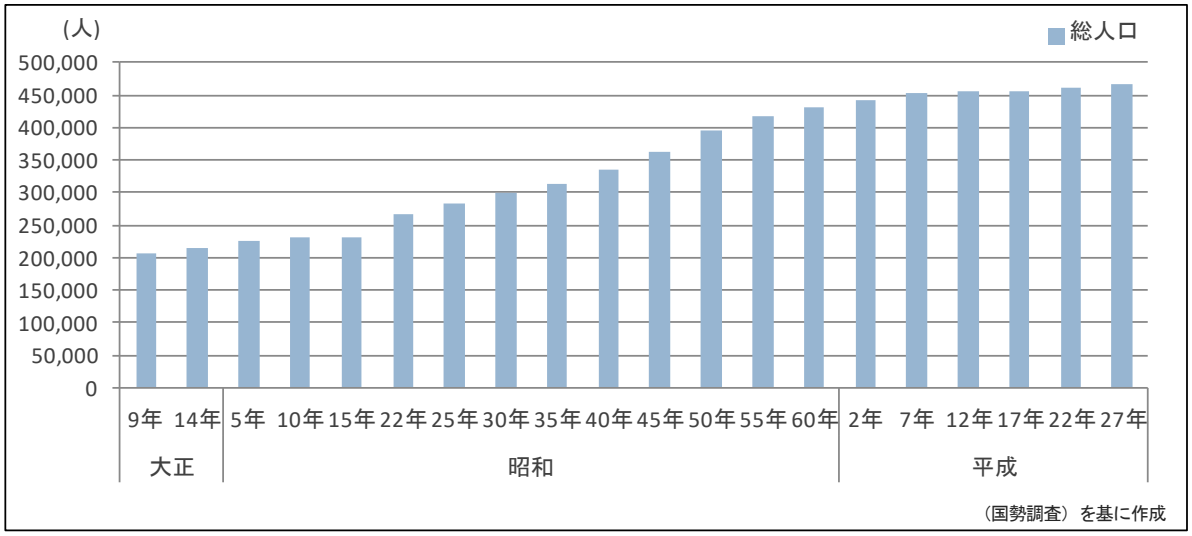
項目	総数	耕地面積	林野面積	その他の土地
面積［km2］	468.64	36.60	273.54	158.50
割合［%］	100	7.8	58.4	33.8

（平成 27 年 石川県統計書 抜粋（土地））を基に作成

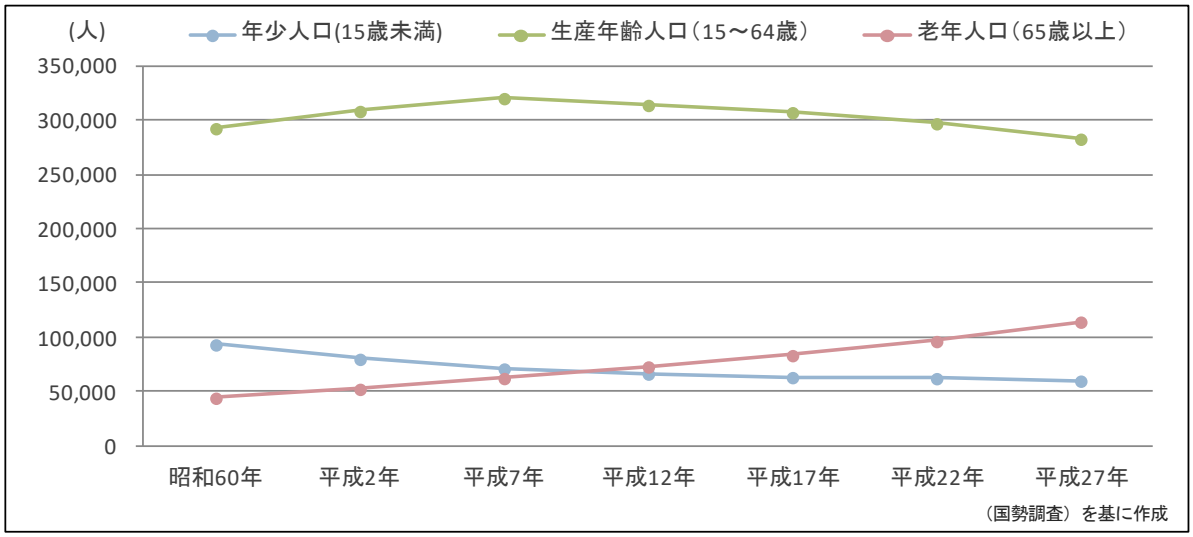
（３）人口動態

平成 27 年度（2015 年度）国勢調査による本市の総人口は、465,699 人であり、統計を取り始めた大正９年（1920）以降、一部の年を除いて、概ね増加傾向にある。

年齢別人口の推移に関しては、年少人口及び生産年齢人口が減少傾向にある一方、老年人口が増加傾向を示しており、平成 27 年（2015）では、114,346 人で全体の 24.6%となっている。

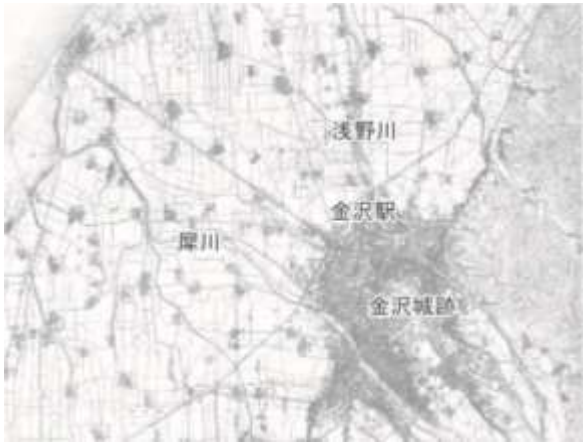


総人口推移



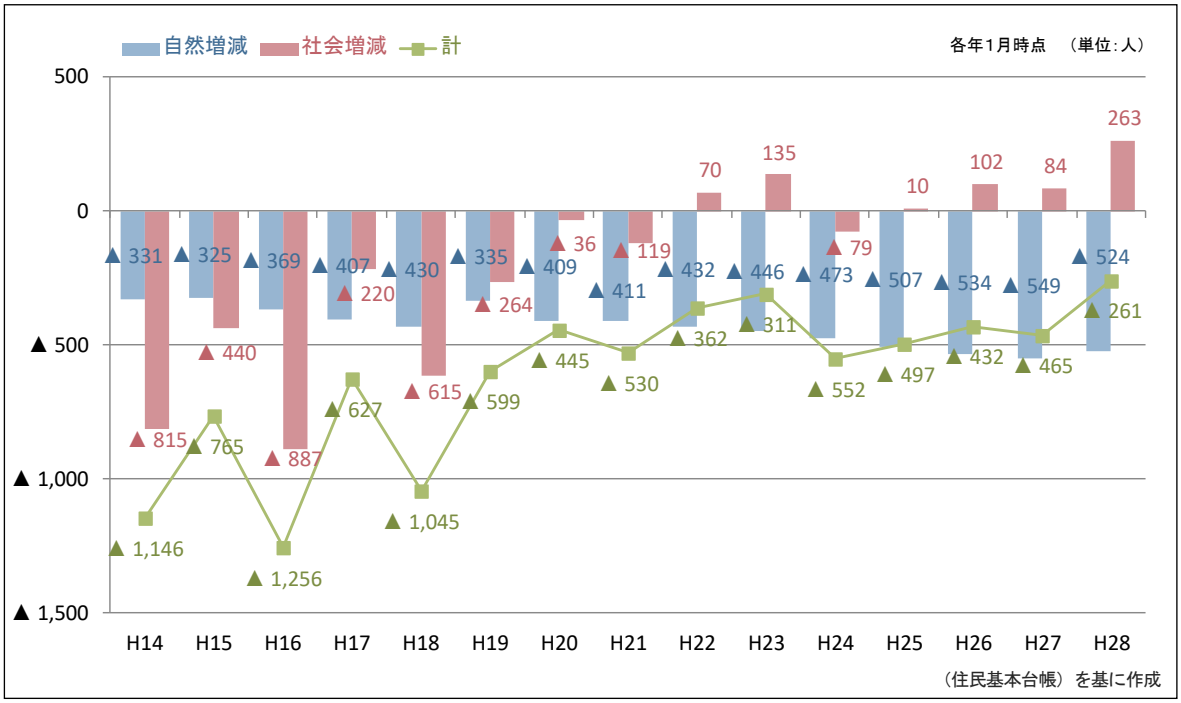
年齢別人口推移

市街地の郊外拡大に伴い中心市街地の居住人口は減少の一途をたどっていた。このため、本市では平成 13 年(2001)「金沢市まちなかにおける定住の促進に関する条例」(平成 28 年(2016)「金沢市定住の促進に関する条例」に改称）を制定し、まちなか定住促進事業としてまちなか区域を設定し、区域内における住宅の新築や修理に対する補助等の支援を行い区域内の社会動態の増加に取り組んでいる。



金沢市街図 昭和 30 年（1955）

金沢市街図 平成 14 年（2002）



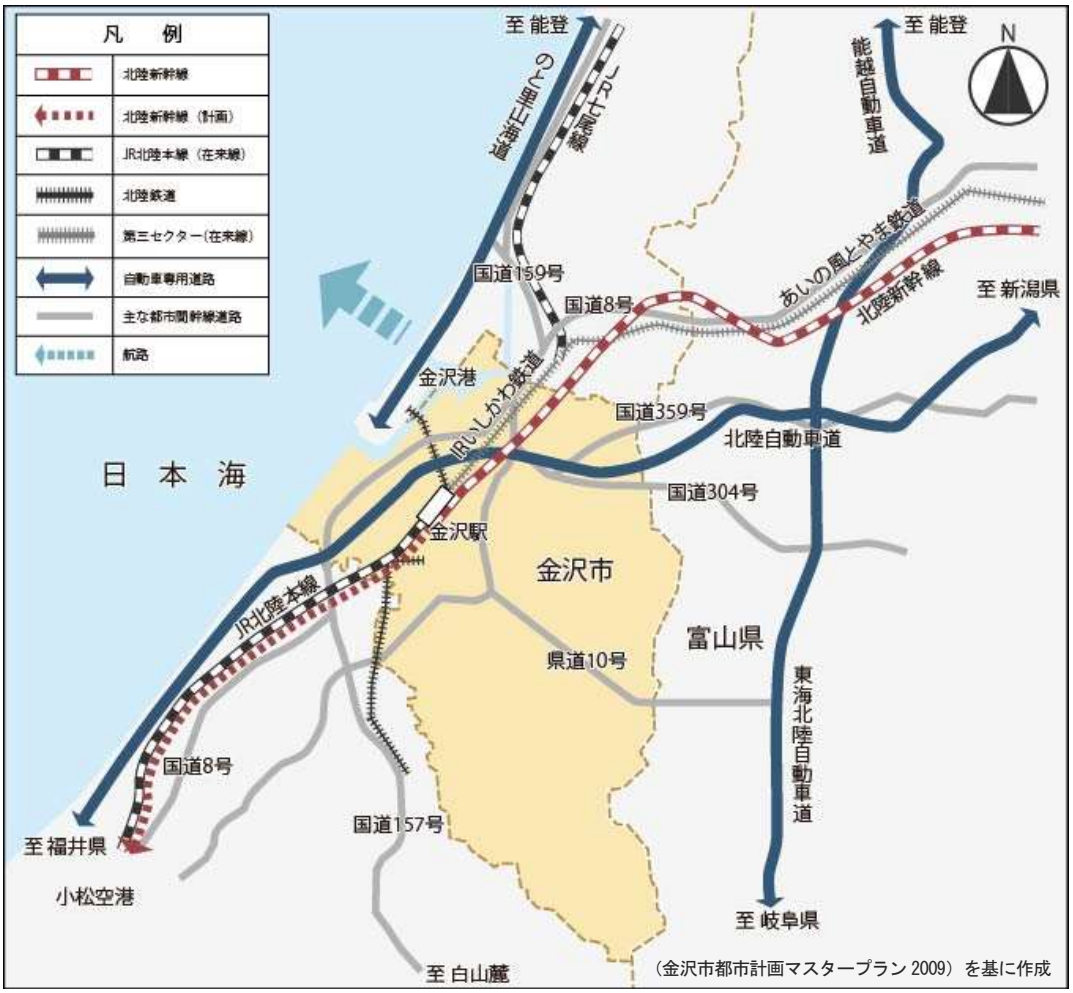
まちなか区域の人口動態

（４）交通機関

藩政期の金沢は加賀藩の政治・経済・文化の中枢であり、交通の要衝として城下を起点とする道路網が集中しており、その代表が北国街道であった。城下の中心部を横断する北国街道は、近代以降も広域幹線国道（国道 157 号、159 号、359 号）として維持・整備され、中心商業・業務地区を形成している。特に、武蔵（むさし）が辻（つじ）、香林坊地区では市街地再開発事業による整備が進み、現在も一部街区で事業が行われている。また、広域幹線道路として北陸自動車道があり、平成 20 年（2008）の東海北陸自動車道の開通により、高速道路を利用した観光、産業分野の広域交流が活発化している。

一方、幹線鉄道としてＪＲ北陸本線に加え、平成 27 年（2015）３月の北陸新幹線金沢開業により新たな広域活動が活発化している。

さらに、国際港湾施設として金沢港は、大深度岸壁の完成により大型貨物船の寄港も可能となり、今後の国際貿易の振興が期待されている。加えて、金沢港はクルーズ船の寄港数が本州日本海側ではトップクラスであり、外国人観光客などによる新たな人の流れが期待されている。また、空港は金沢市内に立地しないが、東京便など国内６路線、ソウル便など国際３路線が発着する小松空港まで約１時間の位置にある。

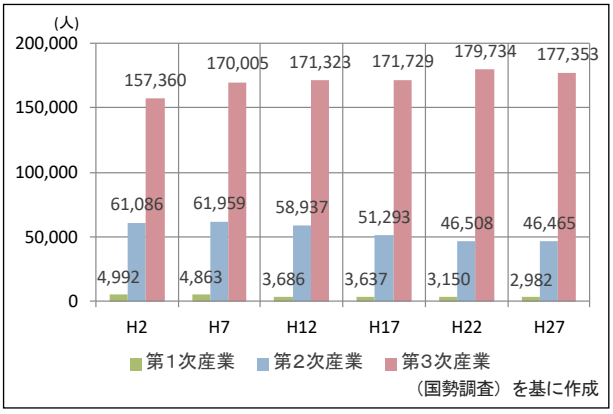


広域交通網

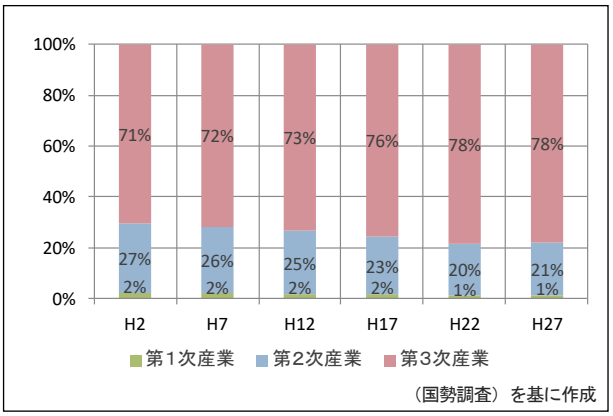
（５）産業

現在の金沢の産業活動は、平成 27 年（2015）の国勢調査によると、15 歳以上就業者総数 226,800 人のうち、第１次産業就業者数が全体の約 1.3%、第２次産業就業者数が 20.5%、第３次産業就業者数が 78.2%と、第３次産業の占める割合が最も高く、商業都市としての性格が強まっている。

金沢の農業は、都市近郊型農業であり、平坦地域、砂丘地域、河北潟（かほくがた）地域、中山間地域、市街化地域に大別し、それぞれ地域の特性を活かして、水稲をはじめ野菜や果樹、花き等、多種多様な農産物が生産されている。また、金沢の風土が育み、今日まで受け継がれてきた伝統野菜「加賀野菜」や、優れた品質と豊富な生産量を誇り、他地域との差別化を図る「金沢そだち」が栽培されており、藩政期から市民の生活に深く溶け込んでいる金沢固有の食文化の継承と発展を目指している。



産業別人口の推移



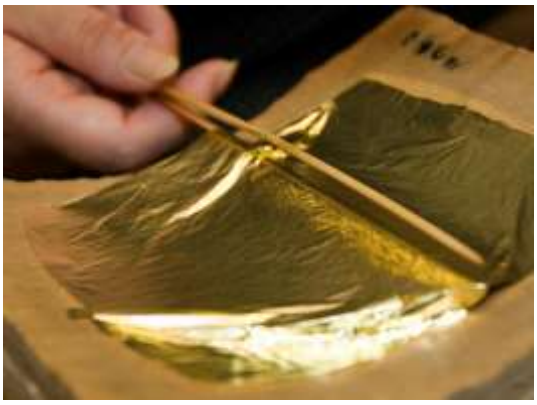
産業別人口の割合

加賀野菜

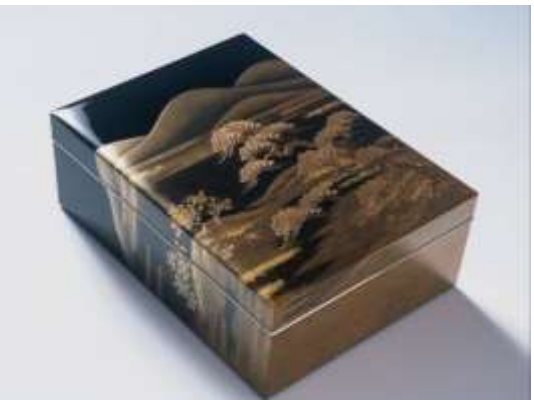
金沢そだち

金沢の工業は、平成 26 年（2014）工業統計調査によると、製造品出荷額において、生産用機械器具製造が最も多く、次いで食料品製造、金属製品製造の順となっている。また、藩政期からの職人技を受け継ぐ、金箔（きんぱく）、漆器、染色、陶器などの産業が近代以降現在まで伝統産業として残っているほか、醤油（しょうゆ）、日本酒の製造業も藩政期から盛んに行われており、金沢の特徴的な産業となっている。

金沢の商業は、平成 14 年（2002）「商業環境形成指針」とともに、「金沢市商業環境形成まちづくり条例」の施行により、市全体の適正な商業施設の配置を目指し、大型店舗と商店街が共存する個性豊かな都市環境の形成に取り組んでいる。



金沢箔（かなざわはく）



金沢漆器

加賀友禅

九谷焼

大型店舗（片町）

商店街（竪町）

（６）観光

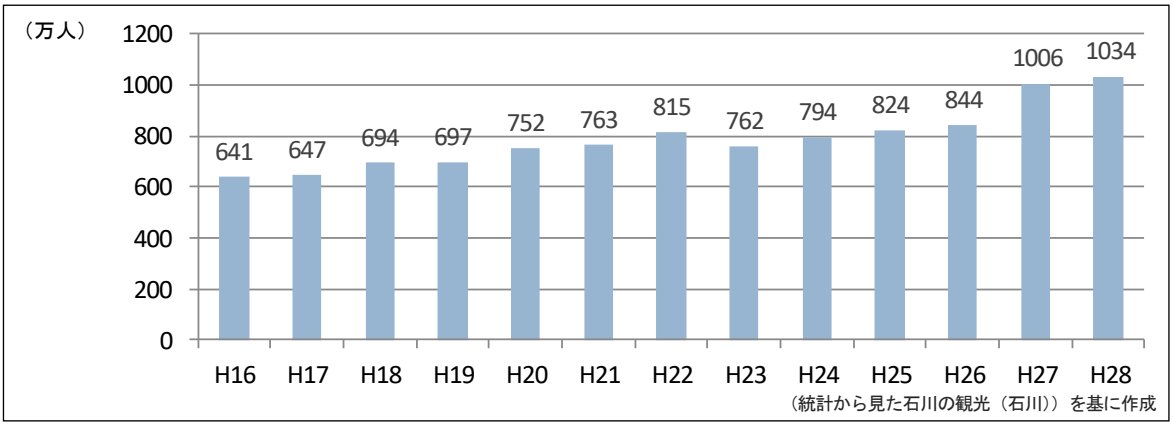
金沢の観光資源は、金沢城や兼六園を始めとして、３茶屋街や３寺院群など歴史や文化を感じられるものや、金沢駅もてなしドーム・鼓門や金沢 21 世紀美術館等に代表される創造的かつ革新的で刺激的なものも合わせ持っている。

また、平成 27 年（2015）３月の北陸新幹線金沢開業によって本市は三大都市圏から２時間半の時間圏に位置することになり、多くの観光客が金沢を訪れている。

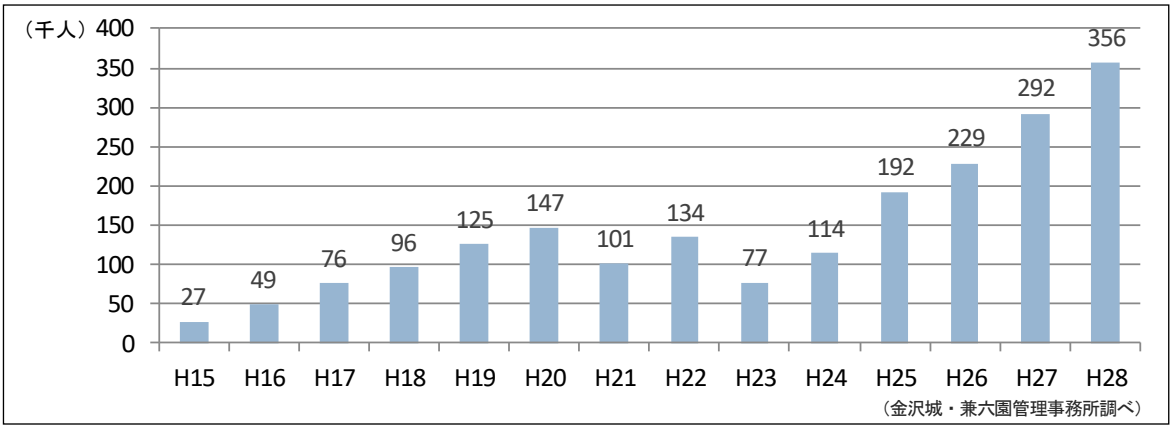
特に外国人旅行者数は年々大幅に増加している。このため、市民生活との調和を図りながら、本市の産業観光の振興、交流人口と定住人口の増加、都市機能の発展に確実につなげていくため、平成 28 年（2016）に「金沢市観光戦略プラン 2016」を策定し、ほんものの日本を発見できる街として、観光政策の推進に取り組んでいる。

兼六園

金沢駅もてなしドーム・鼓門



年間入込客数（金沢市を含む４市２町）



兼六園の外国人入園者数

３．歴史的環境

（１）歴史

①中世以前

平成４年（1992）、金沢城石川門前の土橋や車橋の発掘調査が始まり、その掘削土の中から旧石器時代の石器が発見され、金沢における縄文以前の人々の活動が確認された。

市中心部から西郊外に位置する「北塚遺跡」は縄文中期の遺跡であるが、日本で初めて石製の指輪が出土している。また、市中心部から西南郊外に位置する「チカモリ遺跡」（国指定史跡）は縄文時代後・晩期の遺跡で、日本で初めて多数のクリの巨大木柱根が発見された。その建物は儀礼的・祭祀（さいし）的なものであったと推定され、当時の高度な建築技術と深い精神性を示すものと考えられている。

チカモリ遺跡

西念・南新保遺跡（方形周溝墓）

弥生時代の遺跡は金沢においても多数発掘されており、市中心部から北西郊外に位置する「西念・南新保遺跡」は広大な集落遺跡であり、竪穴式住居跡、方形周溝墓や溝の跡が多数発見され、土器のほか保存状態の良い木製品も大量に出土した。中でも精巧な細工が施された木製高杯の発見は全国的にも注目された。

おまる塚古墳

市中心部から西郊外に位置する「おまる塚古墳」と「びわ塚古墳」（いずれも市指定史跡）は、金沢の代表的古墳である。また、市北部の丘陵地には「小坂古墳群」や「塚崎横穴古墳群」がある。

びわ塚古墳

８世紀初めの頃までに始まったと考えられる金沢西部の開発史の中で、横江荘と呼ばれる荘園がある。弘仁９年（818）、東大寺領横江荘が文献上初めて姿を見せるが、現在、その遺跡は広く白山市と金沢市に広がっている。チカモリ遺跡の西方向に位置する「上荒屋遺跡」は、東大寺領横江荘遺跡（国指定史跡）の一部であり、奈良・平安

時代の建物跡や運河跡のほか、木簡とともに多数の「東庄」墨書土器が発見され、当時の荘園の様々な側面を知ることができる。

弘仁 14 年（823）、越前国から江沼郡、加賀郡を分けて加賀国が立国している。当時、朝廷は渤海からの使節を能登福良泊に積極的に受け入れていたが、その交流の跡を金沢の遺跡からも窺うことができ、市中心部から北西郊外に位置する「畝田ナベタ遺跡」で渤海からの文様入り帯金具が出土している。また、北陸地方では７世紀後半から地方豪族の氏寺が確認されているが、平成８年（1996）、金沢 21 世紀美術館建設に伴い発掘調査が行われた「広坂遺跡」で古代の瓦溜まりが発見され、区画溝の一角や柵列跡も確認され、大規模な古代寺院跡であったことがわかり、「広坂廃寺」と呼ばれるようになった。

東大寺領横江荘遺跡（上荒屋遺跡）

平安時代末期から加賀では手取扇状地東部の開発に在地領主林氏が成功し、同族の武士団が金沢を含む一帯に存在していた。また、金沢南部の泉野扇状地を本拠とする武士団に富樫氏がいたが、承久の乱（1221）の後上皇方に味方した林氏の勢力が衰え、代わって富樫氏が勢力を拡大していった。建武２年（1335）、富樫氏十七代高家が足利尊氏より加賀国守護に任じられ、以後富樫氏が守護として加賀を治めることとなった。

広坂遺跡の発掘調査状況（現金沢 21 世紀美術館敷地）

②中世

鎌倉時代から室町時代にかけて新仏教が武士や民衆の間に広まったが、中でも浄土真宗は、嘉吉２年（1442）、如乗が二俣（ふたまた）本泉寺を建て、宝徳元年（1449）以降の蓮如の布教により北陸に広まった。嘉吉の乱（1441）をきっかけとして、守護職をめぐり富樫政親と幸千代の兄弟間で争いとなり、その争いは越前の朝倉氏、甲斐氏や本願寺門徒を巻き込み激しさを増していった。文明６年（1474）、富樫政親が争いに勝利し加賀一国の守護となったが、以後、本願寺門徒の勢力を嫌い弾圧していった。長享元年（1487）、将軍足利義尚の近江六角氏討伐に出陣するための兵糧などの徴収をきっかけとして、これに反発する一向宗農民門徒などを中心とした一揆が起き、長享２年（1488）、加賀国守護富樫政親は強大な加賀一向一揆軍の前に高尾城で滅ぼされた。富樫氏ゆかりと伝えられる「御廟谷（ごびょうだに）」（県指定史跡）が南部丘陵の山中に遺されている。その後、「加賀は百姓の持ちたる国」となり、天文 15 年（1546）本願寺十世法主証如を中心に一揆の中核を担った人々により小立野（こだつの）台地の先端部、現在の金沢城跡の一角に「金沢御堂」が建立された。当時、「金沢御堂」は本山の大坂石山本願寺を模した防御施設を備えた城郭寺院であったと考えられており、その門前に形成された旅屋や商工業者による寺内町が金沢の都市の始まりといえる。天正８年（1580）「金沢御堂」が陥落し、加賀一向一揆が鎮圧された後、天正 11 年（1583）その跡に築かれた金沢城に前田利家が入城し、近世城下町の建設が始まった。

戦国時代末期、北陸も戦乱の地となるが、市街地の北東方向の富山県境に位置する松根城跡（国指定史跡）は、戦国時代（16 世紀後半）の山城跡で、曲輪（くるわ）、堀切、土塁などの遺構をよく遺しており、同様の城跡が旧加越国境（かえつくにざかい）一帯に分布している。

城下町の中心を成した金沢城は、小立野台地の先端部に築かれた平山城（標高 35m～65m）で、前田利家入城後から大規模な普請が行われ、天正 14 年（1586）には天守が完成している。（天守は落雷により慶長７年（1602）に焼失）文禄元年（1592）からは本格的な石垣普請も始まり、金沢の東部山間地で産出する戸室石を使用した高石垣が順次構築され、近世城郭としての整備が進められた。

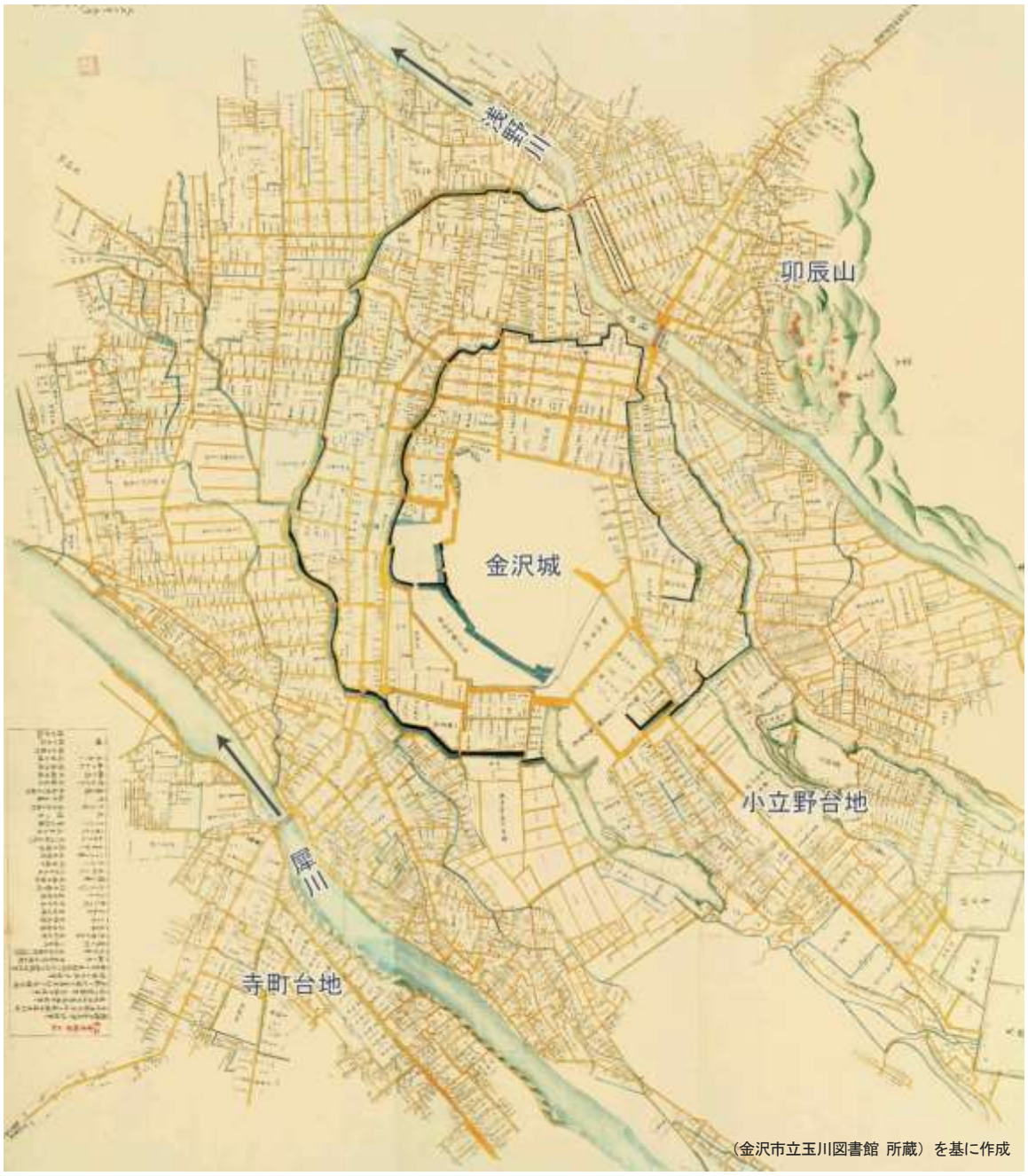
松根城跡

金沢城跡

③近世

ｉ）都市形成

関ヶ原合戦以降、金沢は加賀藩の政治、経済、文化の中心として重要な機能を果たし、最大大名の城下町として日本を代表する城下町が形成されていった。江戸時代の金沢城下町絵図などの史料から判断すると、金沢城下町の主要な都市構造は寛文・延宝期（1661～81）にほぼその形成を終えたといえる。



延宝年間金沢城下図

寛永８年（1631）の大火で金沢城の中心部が焼失し、本丸・二の丸・三の丸などの配置が再整備された。宝暦９年（1759）の大火では城下とともに城内の大半が焼失し、二の丸御殿、菱櫓（ひしやぐら）、五十間長屋（ごじっけんながや）、石川門などはその後再建されたが、本丸の櫓（やぐら）などの建物は再建されることはなかった。文化５年（1808）に再度二の丸御殿が焼失するが、その後従前を上回る規模で再建され、安政５年（1858）には宝暦の大火で焼失していた三十間長屋（さんじっけんながや）が再建されている。金沢城は外堀内に本丸・東の丸・二の丸・三の丸・新丸・玉泉院丸・北の丸などが位置し、その外郭に位置する兼六園、堂形など関連施設を加えると約 48ha の規模となる。

金沢城の南東に位置する兼六園は、延宝４年（1676）五代藩主綱紀による蓮池庭と御殿の建設がその始まりで、宝暦の大火（1759）で失われたその園地を安永３年（1774）に十一代藩主治脩が復興した。寛政４年（1792）には隣接する千歳台に藩校「明倫堂」と「経武館」が建設されている。文政５年（1822）十二代藩主斉広は藩校を移転して庭園を千歳台まで拡大し、隠居所として竹沢御殿を建設した。その頃、松平定信が「兼六園」と揮毫（きごう）している。名は宋代の「洛陽名園記」から、宏大・幽邃（ゆうすい）・人力・蒼古（そうこ）・水泉（すいせん）・眺望の六勝を兼備する庭園の意といわれる。その後、十三代藩主斉泰が竹沢御殿を縮小し、曲水を回らして霞ヶ池を拡張し、近世大名庭園としての完成をみた。

五十間長屋（ごじっけんながや）

石川門

三十間長屋（さんじっけんながや）

兼六園

城下町形成の初期段階からその拡大過程において、その空間を大きく規定したものに惣構（そうがまえ）がある。金沢では内・外二重に惣構が築かれ、防衛上の要所に升形がつくられた。内惣構は慶長４年（1599）、外惣構は慶長 15 年（1610）に築造とされ、その際に支障となった既存集落、寺院等の移転や武家地の配置転換が行われるなど計画的な城下町空間の伸張を見ることができる。城下町の防衛を意図して城下三方の縁辺（えんぺん）部に配置された卯辰山山麓（うたつやまさんろく）、小立野（こだつの）、寺町の寺院群は、寺院の数と規模において他の城下町に類例がない。また、「加賀八家（かがはっか）」と呼ばれる大名クラスの家臣団屋敷が、その上屋敷を中心にして金沢城を囲むかたちで小城下のように形成され、金沢は複合的な構造をもつ大型城下町として完成した。

惣構（そうがまえ）位置（延宝期絵図）

惣構に加え金沢の城下町形成と深く関わるものに、城下を縦横に流れる用水がある。これらの用水は犀川（さいがわ）、浅野川を水源とし、城下町の防衛・防火、人々の生活用水としての機能を果たすとともに、灌漑（かんがい）用水として平野を潤し、加賀百万石を支えてきた。主なものに大野庄用水、辰巳用水、鞍月（くらつき）用水がある。大野庄用水は藩政期以前、辰巳用水は寛永９年（1632）、鞍月用水は正保年間（1644～48）の成立とされており、17 世紀半ばには城下の用水網が整備されていたといえる。なお、これら城下の用水には文政７年（1824）時点で 221 の小橋が架けられていた。

現在の用水網（55水系）

さらに、城下町が整備される中で、金沢は交通の要所として領内各所を結ぶ道路網の起点ともなり、北国街道や金沢往還（おうかん）と総称された城下と周辺地域を結ぶ幹道が放射状に伸びていた。北陸における基幹道で城下中心部を南北に縦断していた北国街道は、沿道に有力町人の町家が建ち並び、参勤交代にも利用された道で、城下の下口（しもくち）（北）と上口（かみくち）（南）には城下の境として松が植えられ、「松門（しょうもん）」と呼ばれていた。また、幹道のひとつであった湯涌（ゆわく）道は、越中五箇山から城下町近郊の土清水塩硝蔵（つっちょうずえんしょうぐら）に上煮塩硝と呼ばれる純度の高い塩硝が運ばれていた道で、その途中に位置する湯涌温泉は当時から湯治場として知られていた。

屈折する街路

広見（ひろみ）（寺町）

一方、城下町自体を構成する街路網は、防衛の目的や起伏ある地形の影響もあり、直線的な街路以外に様々なかたちに屈折した細街路や坂路（さかみち）が多く、街路の交叉部分には「広見（ひろみ）」と呼ばれる広がりをもつ空間が何箇所も存在し、城下全体が迷路的で複雑な様相を見せていた。

（金沢市立玉川図書館 所蔵）

寛文８年（1668）金沢城下町絵図

（作成:金沢工業大学教授　増田達男 ）

残存する街路重ね図

現在も残る金沢の街路網

ⅱ）工芸技術・伝統文化

能楽や茶の湯は武士の嗜(たしな)みであったが、やがて広く庶民の間にも広まっていった。加賀の能は、藩の能役者が舞う「藩主の能」と庶民が神に奉納する神事能を舞う「庶民の能」があり、五代藩主綱紀が宝生(ほうしょう)流を取り入れたことから「加賀宝生(かがほうしょう)」として栄え、城下町の外港であった宮腰(みやのこし)（現金石(かないわ)）に近い大野湊神社(おおのみなとじんじゃ)では慶長９年（1604）から神事能が奉納されている。

大野湊神社(おおのみなとじんじゃ)神事能

また、三代藩主利常に招かれた茶道宗和流金森宗和や裏千家仙叟宗室(うらせんけせんそうそうしつ)により広まった茶の湯が、工芸、作庭、建築などの分野に大きな影響を与えた。

加賀蒔絵(かがまきえ)

金沢の近世城下町としての整備は加賀藩の発展とともにあったが、三代藩主利常が経済的基盤を確立するためにとった農政改革である「改作仕法」の施行後、藩の財政が豊かになり、その財力を背景として美術工芸の振興が図られた。当時の加賀藩の文化活動として特筆されるものに、優れた文物の収集と美術工芸品を中心とした「物造り」の育成がある。京や江戸から招聘(しょうへい)した各分野の名工を御用職人として城内「御細工所(おさいくしょ)」の職人指導にあたらせ、やがてその技術は町方の細工人にも広まっていった。当初、「御細工所」は武器武具の修理・管理を行う組織であったが、三代藩主利常が管理部門と修復・製作部門に組織化し、さらに茶の湯道具、掛幅、印章など美術工芸品の製作や修復を手がけるようにした。五代藩主綱紀の頃には「御細工所」の職種は、針細工、小刀細工、紙細工、絵細工、塗物・蒔絵(まきえ)細工、象嵌(ぞうがん)細工など 20 を越えるまでになった。なお、御細工者は、元禄元年（1688）から本職のほかに能技芸についても錬磨することが求められるようになり、能楽の伝統を維持する上でも大きな役割を果たした。また、五代藩主綱紀は、古今東西の図書を収集し「尊経閣文庫」として大成したほか、全国から２千点を超える工芸・技術資料を収集し、整理・分類した「百工比照(ひゃくこうひしょう)」を完成している。

加賀象嵌(かがぞうがん)

④近代

明治維新により、金沢は城地や城下町の広大な武家地の一部が軍用地として変容した。旧城内には第九師団指令部が置かれ、兼六園に隣接した出羽町一帯には練兵場、兵器支廠（ししょう）が建設された。また、近世に堂形前と称された広坂界隈（かいわい）には県庁、市役所が置かれ、旧藩校跡地には第四高等中学校が、旧加賀八家下屋敷跡には石川県第二中学校が設置された。さらに、明治初期に旧金沢城金谷出丸に造営された尾山神社神門は、擬洋風の特徴的なデザインで建設されている。

このように、近代以降の金沢は、城地や武家地の一部が軍事用に転換され、関連して道路・鉄道など都市基盤施設の整備が併せて進められ、この間、庁舎建築や学校建築などの公共施設に加えて金融・保険関係の事務所建築を中心に民間でも多くの洋風建築や近代建築が建設された。

金沢市は近代に入り旧城下町を中心として都市化が進み、市制が施行された明治 22 年（1889）以降、周辺町村を編入する形で市域が拡大し、現在では日本海から富山県境に至る範囲（468.64 ㎢）が市域となっている。

旧第九師団司令部庁舎（現石川県庁舎石引分室）

旧第四高等中学校（現石川四高記念文化交流館）

旧石川県第二中学校（現金沢くらしの博物館）

尾山神社神門

⑤現代

第二次世界大戦が終戦を迎えると、陸軍施設として利用されていた金沢城跡に金沢大学、出羽町一帯に金沢美術工芸大学、金沢女子短期大学が設置されるなど、金沢中心部の大規模な軍用地は、新たに文教施設として変容を遂げた。

現在、藩政期から金沢の都市核である金沢城跡・兼六園を中心とした一帯は、各大学の郊外移転を契機に公園としての整備が進んでいる。金沢城跡は金沢城公園として整備が進み、平成 13 年(2001)には菱櫓(ひしやぐら)・五十間長屋(ごじっけんながや)・橋爪門続櫓(はしづめもんつづきやぐら)が木造で復元され、平成 22 年(2010)には河北門が復元され、平成 27 年（2015）に、玉泉院丸庭園が再現された。出羽町一帯では旧軍関連施設の近代建築や文化施設が多く立地する特性を活かし、緑豊かで歴史・文化を感じさせる本多の森公園として整備が進んでいる。さらに、令和２年（2020）には、東京国立近代美術館工芸館の同地区への移転が予定され、施設建物には国登録有形文化財である「旧陸軍第九師団司令部庁舎」と「旧陸軍金沢偕行社」の活用が予定されている。

堂形前では、平成 15 年（2003）県庁移転を契機とした跡地整備が進められ、旧第四高等中学校校舎は平成 20 年（2008）石川四高記念文化交流館として整備され、旧県庁舎の近代建築は平成 22 年（2010）保存・活用を目的とした石川県政記念しいのき迎賓館として整備された。

このように、金沢城跡・兼六園を中心とした一帯は、歴史・文化ゾーンとして金沢を象徴する都市空間となっている。

金沢城跡（橋爪門続櫓(はしづめもんつづきやぐら)）

石川四高記念文化交流館（旧第四高等中学校）

石川県政記念しいのき迎賓館（旧石川県庁舎）

都市形成の歴史と工芸技術・伝統文化関連略年表

西　暦	年　号	歴　史　的　事　項	摘　　要
1488	長享2	加賀一向一揆が守護富樫氏を滅ぼす	
1546	天文15	金沢御堂が建立される	
1580	天正８	佐久間盛政が金沢御堂を攻略する	金沢城
1583	天正11	前田利家が金沢城に入城し、城下町の建設が始まる	
1586	天正14	金沢城天守が完成する	
1592	文禄元	金沢城が修築され、本格的な石垣普請が行われる	
1592	文禄元	二俣が加賀藩御料紙の産地として指定される	二俣和紙
1593	文禄２	金箔･銀箔が作られはじめる	金沢箔
1599	慶長４	前田利家が野田山に葬られる	野田山･加賀藩主前田家墓所
1599	慶長４	二代藩主前田利長が高山右近に命じて内惣構を築く	惣構
1602	慶長７	落雷により天守が焼失する	金沢城
1604	慶長９	大野湊神社に神事能が奉納される	大野湊神社寺中神事能
1610	慶長15	三代藩主前田利常が篠原出羽守一孝に命じて外惣構を築く	惣構
1596 -1615	慶長期	小立野台地へ寺院を集める	小立野寺院群
1616	元和２	卯辰山山麓･寺町台地へ寺院を集める	卯辰山山麓寺院群･寺町寺院群
1631	寛永８	大火により城の中心部が焼失する	金沢城
1632	寛永９	辰巳用水がつくられる	辰巳用水
1635	寛永12	城下町が大火に見舞われ、広見が設けられる	街路空間･広見
1624 -1644	寛永期	三代藩主前田利常が金森宗和、千仙叟宗室を招く	茶の湯
		後藤程乗、五十嵐道甫、清水九兵衛らが招かれる	加賀象嵌･加賀蒔絵
1644 -1648	正保期	鞍月用水がつくられる	鞍月用水
1651	慶安４	三代藩主前田利常が改作仕法を始める	
1666	寛文6	長左衛門が招かれ、大樋焼を始める	大樋焼
1671	寛文11	長坂用水がつくられる	長坂用水
1676	延宝４	五代藩主前田綱紀が蓮池庭と御殿を建設する	兼六園
1684 -1704	貞享・元禄期	五代藩主前田綱紀が能楽「宝生流」を取り入れる	加賀宝生
この頃までに城下町の基盤が整備される			
1718	享保3	宮崎友禅斎が加賀友禅を始める	加賀友禅
1643 -1724	延宝・元禄期	五代藩主前田綱紀が百工比照をつくる	伝統工芸
1759	宝暦9	大火により城下町と城の大半が焼失する	金沢城
1774	安永3	十一代藩主前田治脩が園地を復興する	兼六園
1808	文化5	金沢城二の丸御殿が焼失する（のち再建）	金沢城
1820	文政3	ひがしが茶屋街として公許される	東山ひがし重要伝統的建造物群保存地区
1822	文政5	十二代藩主前田斉広が竹沢御殿を建設する	兼六園･成巽閣
1804 -1830	文化・文政期	大石藤五郎が加賀万歳を始める	加賀万歳
1858	安政5	金沢城三十間長屋が再建される	金沢城
1875	明治8	尾山神社神門がつくられる	尾山神社神門
1891	明治24	第四高等中学校が置かれる	旧第四高等中学校本館
1909	明治42	陸軍兵器支廠が建設される	旧金澤陸軍兵器支廠
1913	大正2	陸軍兵器支廠が建設される	
1914	大正3	陸軍兵器支廠が建設される	

（２）金沢の歴史的風致形成に関わりのある主な人物

金沢の歴史的風致の形成に関わりのある主な人物のうち、本計画に記載のある人物を以下に挙げる。

①富樫高家（生没不詳）

富樫氏は、藤原利仁に始まる氏族である。室町時代に加賀国（現在の石川県南部）を支配した守護大名である。

建武２年（1335）、十七代高家は足利尊氏方につき戦いで手柄を立てたことで、尊氏より加賀国守護職に任じられた。その後も代々、守護として加賀国を統治した。

②富樫政親（1455～1488）

嘉吉元年（1441）に京都で起こった嘉吉の乱をきっかけに、弟である幸千代と守護を巡って争ったが、文明６年（1474）兄弟間の争いに勝利し、加賀一国の守護となる。この争いの渦中に、高尾山に高尾城を築いた。

その後、本願寺門徒の勢力を嫌い、門徒弾圧を行うが、長享元年（1487）、将軍足利義尚の近江六角氏討伐のための兵糧などの徴収に反対する一向宗農民門徒を中心とする一揆が起き、長享２年（1488）一揆軍を前に高尾城で敗れる。

③佐久間盛政（1554～1583）

金沢城の初代城主。

天文 15 年（1546）に創建された金沢御堂は、天正８年（1580）、佐久間盛政によって攻め落とされた。盛政は、天正８年～11 年（1580～1583）の間、在城した。

佐久間盛政

④前田利家（1539～1599）

加賀藩初代藩主。

尾張国（現在の名古屋市）の荒子城主前田利春の四男として生まれた。天正 11 年（1583）、賤ヶ岳の戦いの後、佐久間盛政に代わり金沢城へ入城した。その後、末森の戦いで越中（富山県）の佐々成政を破り、能登や加賀、越中を支配する大大名へ歩んでいった。

また、文禄元年（1592）に二代藩主利長に金沢城の造り替えを命じたほか、城下町の建設を始めるなど、城下町金沢を大きく発展させた。

前田利家

⑤前田利長（1562～1614）

（こども金沢市史）
前田利長

加賀藩二代藩主。

初代藩主利家の長男である利長は、徳川幕府との関係に苦慮しながらも母である芳春院を江戸に人質として出すなど、加賀藩の存続と発展に力を尽くした。関ヶ原の戦いでは徳川に付き、外様ながら能登や加賀､越中を合わせた百二十万石の大大名となった。

また､利長は慶長４年(1599)金沢城防備のため､東西に内惣構を造らせた。

⑥前田利常（1594～1658）

（こども金沢市史）
前田利常

加賀藩三代藩主。

利常は徳川二代将軍秀忠の娘(珠姫)を妻として迎えることで、徳川幕府との関係改善に努めながら、防衛のための都市整備を積極的に行った。城の近くには武士を、その周囲に商工業者を住まわせたり、寺院については、小立野台や卯辰山麓、寺町台へ集めるなどの整備を行った。

また､「改作仕法」により財政が豊かになったことを背景に、美術工芸の振興にも尽力し、京都や江戸などから名工を招聘し、御用職人として「御細工所」の職人指導にあたらせた。

さらに、慶長 15 年（1610）には、東西に外惣構を造らせた。

⑦前田綱紀（1643～1724）

（こども金沢市史）
前田綱紀

加賀藩五代藩主。

綱紀の治世においては、藩体制の整備が完了したほか、人口も大きく増え、江戸や大坂、京都に次ぐほどの大都市に成長した。

綱紀は学問を好み、有名な学者を金沢に招いたり、貴重な書物を国中から集めることに力を入れた。江戸時代を代表する学者である新井白石は､「加賀は天下の書府」であると褒めたたえたと云われ、それら書物は、質、量ともにずば抜けたものとなり「尊経閣文庫」として、現代に残されている。

また、綱紀は細工人の技術向上と、工芸技術の保存と記録のため「百工比照」を作った。これは、全国から選りすぐって収集した二千点以上の工芸品を整理、分類したもので、江戸時代中期頃までの最高レベルの工芸品と一流の職人技を伝える貴重なものである。

⑧前田治脩（1745～1810）

加賀藩十一代藩主。

江戸時代各藩は、家臣の教育のために学校（藩校）を建てた中、加賀藩にあっても、治脩が寛政４年（1792）、「明倫堂」と「経武館」を現在の兼六園内に建てた。「明倫堂」は士農工商の身分を問わず８歳以上の男子が入校でき、儒学を中心に様々な分野を学ぶことができた。「経武館」は武芸の鍛錬を目的とし、剣術や弓術、柔術など様々な武芸が教えられた。

また、兼六園の始まりとされている五代藩主綱紀の別荘の茶室や庭が、宝暦９年（1759）の大火で焼失したため、安永３年（1774）、治脩は四つの亭や滝を造って園地を復興させた。

⑨前田斉広（1782～1824）

加賀藩十二代藩主。

斉広は、加賀藩の財政が苦しいにも関わらず、文政５年（1822）、現在の兼六園の千歳台辺りに壮大な自己の隠居所「竹沢御殿」を造営した。また「兼六園」という名は、斉広の、依頼を受けた松平定信によって揮毫された。

前田斉広

⑩前田斉泰（1811～1884）

加賀藩十三代藩主。

斉泰は、先代の十二代藩主斉広が造った「竹沢御殿」を取り壊し、霞が池を広げたり、園内の大きな曲水とそれを楽しむ橋を架けるなど、庭の拡張、整備を進め、また、蓮池庭との間にあった門と塀を撤去し、一大庭園を造り上げた。さらに、文久３年（1863）には、母である真龍院の隠居所として巽御殿（現在の成巽閣）を造り、現在の兼六園の基本的な構造が完成した。

⑪高山右近（1553～1615）

摂津高槻（現在の大阪府高槻市）の大名であった高山右近は、敬虔なキリスト教信者であった。豊臣秀吉の家来であった右近は、秀吉のキリシタン大名追放により、領地を取り上げられたが、天正 16 年（1588）、利家に招かれ金沢で過ごすことになった。

右近は、築城技術の才能が豊かで、金沢城や高岡城の築城、内惣構の建設に大きな役割を果たし、金沢の街づくりを支えたと伝えられている。

高山右近

⑫篠原出羽守一孝（1561～1616）

初代藩主利家の正室芳春院の従兄弟篠原長重の養子になり、若い頃から利家に仕えた。一孝は三代藩主利常の命で慶長 15 年（1610）外惣構の建設を行った。

金沢市本多町にある「嫁坂」は、一孝の娘が本庄主馬に嫁ぐ際に、荷物を運ぶために造ら

れたと言われている。

⑬金森宗和（1590～1656）

茶道宗和流の祖である宗和は、茶の湯に熱心であった三代藩主利常に招かれ、利常の茶道の師匠として仕えた。宗和の息子七之助も寛永２年（1625）には三代藩主利常の茶頭となっていた。

⑭仙叟宗室（1622～1697）

裏千家の祖である仙叟は、千家三代宗旦の四男として生まれた。始め医師を志し医術を習ったが、父宗旦のもとで修業し茶道に専念するようになった。その後、加賀藩に招かれ、隠居後の三代藩主利常や五代藩主綱紀に仕え、茶道普及に尽力した。

⑮大樋長左衛門（1631～1712）

五代藩主綱紀のもとで茶堂茶具奉行として仕えていた仙叟宗室は、楽家四代一入の弟子であった土師長左衛門を茶碗造り師として金沢に同道した。大樋焼は、長左衛門が大樋村（現在の金沢市大樋町）に楽焼に適した土を見つけ窯を築いたことから始まり、仙叟の指導のもとに茶道具を創作した。

⑯後藤程乗（1603～1673）

三代藩主利常に京都から招かれた程乗は、江戸初期の金工、加賀象嵌の基礎を築いた。金、銀、鉄などの地金に他の金属をはめ込む加賀象嵌は、当初、刀や馬具などの細工が主であったが、やがて床の間の置物や女性の髪飾りなどにも施されるようになった。名工であった程乗は、金属だけでなく石にも彫り物をしたといわれている。

⑰五十嵐道甫（生年不明～1678）・清水九兵衛（生年不明～1688）

三代藩主利常に京都から五十嵐道甫、江戸から清水九兵衛が招かれ、優美で力強い加賀蒔絵の基礎を築いた。加賀蒔絵は江戸蒔絵の華やかさとは違い、京都の伝統と加賀の武家文化を合わせた、非常に格調高いものといわれ、その伝統は、現在に受け継がれている。

⑱宮崎友禅斎（1654～1736）

宮崎友禅斎は、京都で新しい模様染め「友禅染め」を作ったが、享保３年（1718）頃、京都から金沢に移り住み新しいデザインの模様染めを次々と発表し、「加賀友禅」を作り出した。「加賀友禅」は、草花模様を主体に絵画的な落ち着いた雰囲気がある。仕上がりまで14ある工程の一つで、生地に付いている糊や余分な染料を洗い流す「友禅流し」は、現在でも浅野川などで見られる。

⑲大石藤五郎（生没不詳）

加賀万歳は、初代藩主利家が越前の府中（現在の越前市）を治めていた頃、領民が年頭に祝賀のため舞っていたのが、利家の金沢城入城後、金沢城下にもくるようになったものとされる。文化文政（1804～1830）の頃、金屋町の大石藤五郎は、これを伝承発展させて加賀万歳として定着させた。加賀万歳は能楽の影響を受けており、舞いや語りがユーモアの中にも品格がある。

⑳宝生友于（生年不詳～1863）

十五代宝生大夫である宝生友于は、徳川十一代将軍家斉と十二代将軍家慶の指南役として活躍した。その後、大夫を継承したのち金沢に移り、門弟を育て能の振興に尽くした。「加賀宝生」の名称が文献に記されるようになったのも、友于が金沢に来て以降である。

４．文化財等の分布状況

市内における歴史的風致に関わる国指定、選定文化財及びそれ以外の文化財の指定件数は下記表のとおりである。

市内の指定文化財の指定件数　（令和５年１月時点）

種　別		国指定	県指定	市指定	合　計
有形文化財	建造物	13	22	33	68
	美術工芸品	33	107	158	298
無形文化財	工芸技術	3	1	－	4
	芸　能	－	1	2	3
民俗文化財	有形民俗文化財	5	1	4	10
	無形民俗文化財	－	2	11	13
記念物	史　跡	6	2	9	17
	名　勝	3	3	6	12
	天然記念物（※）	3	3	6	12
合　計（件）		66	142	229	437

※は、動物を除く

市内の国選定文化財の件数　（令和５年１月時点）

種　別	件　数
伝統的建造物群	4
文化的景観	1

市内の国登録文化財の件数　（令和５年１月時点）

種　別	件　数
有形文化財（建造物）	116
民俗文化財（有形）	1

市内の市独自条例による保存対象物及びこまちなみ保存建造物件数　（令和５年１月時点）

種　別	件　数
保存対象物	39
こまちなみ保存建造物	48

これらの文化財等の個別名称、所在地等については資料に一覧表を掲載し、歴史的風致の形成に関わる建造物等については、その概要を併せて掲載している。

（１）国指定等文化財

市内には金沢城石川門など 13 件の国指定重要文化財（建造物）があり（近世建築９件、近代建築４件）、金沢城跡や兼六園を中心として、その周辺に位置する重要文化財（建造物）は、金沢の歴史的重層性を感じさせる貴重な歴史遺産である。

また、12 件（動物を除く）の国指定史跡名勝天然記念物があり、種別は名勝３件、史跡６件、天然記念物３件である。史跡１件が城下町の中心であった「金沢城跡」であり、名勝には「兼六園」が特別名勝として指定されている。

国選定重要伝統的建造物群保存地区として、「東山ひがし」、「主計町（かずえまち）」、「卯辰山麓（うたつさんろく）」、「寺町台」がある。「東山ひがし」は、文政期（1818～30）の茶屋街の街並みが保存されており、茶屋建築の重要文化財（建造物）「志摩」が位置する。「主計町」は、浅野川に面して建ち並ぶ近代以降に３階建てとなった茶屋街の街並みが保存されている。「卯辰山麓」は、山麓沿いに寺院を中心とした街並みが保存されており、「寺町台」は、直線的に寺社が連なる街並みと、境内地の一部に形成された寺社門前地の街並みが保存されている。

国選定重要文化的景観として、「金沢の文化的景観　城下町の伝統と文化」が選定されており城下町発展の各段階を投影した都市構造を現在まで継承し、その諸要素が現在の都市景観に反映されるとともに、城下町が醸成した伝統と文化に基づく伝統工芸等の店舗が独特の界隈（かいわい）を生み出している。

国指定重要無形文化財として、銅鑼（どら）、彫金及び友禅の各工芸技術の保持者（人間国宝）が認定され

有形文化財（建造物）
（金沢城石川門）

記念物（名勝）
（兼六園）

重要伝統的建造物群保存地区
（東山ひがし）

重要文化的景観選定区域

ている。その他、国指定重要有形民俗文化財として、伝統工芸、技術と密接に関わる道具類である、金沢の金箔製作用具、北陸地方の木地製作用具、加賀の手漉和紙製作用具及び民家、加賀象嵌製作用具があり、信仰に関わるものとして、真成寺奉納産育信仰資料がある。このほか、縁付金箔製造は、国選定保存技術として選定されている。

国登録有形文化財（建造物）として、74 箇所 116 件が登録されており、（近世建造物 28 件、近代建造物 88 件）国登録有形民俗文化財には、金沢の売薬製造・販売用具 1 件が登録されている。

選定保存技術
（縁付金箔製造）

登録有形文化財
（浅野川大橋）

登録有形民俗文化財
（金沢の売薬製造・販売用具）

国指定文化財の件数　（令和５年１月時点）

種　別		件　数
有形文化財	建造物	13
	美術工芸品	33
無形文化財	工芸技術	3
	芸　能	―
民俗文化財	有形民俗文化財	5
	無形民俗文化財	―
記念物	史　跡	6
	名　勝	3
	天然記念物（※）	3
合　計（件）		66

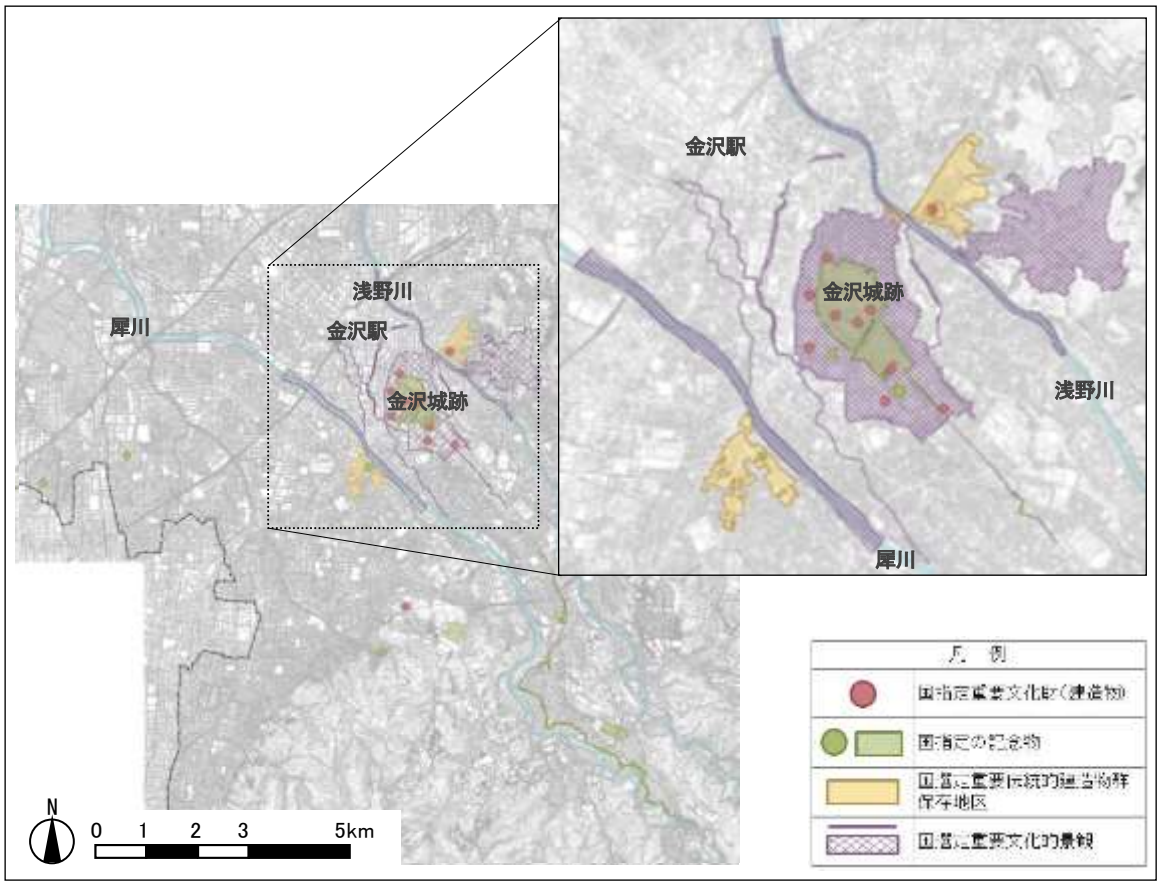
※は、動物を除く

国選定文化財の件数　（令和５年１月時点）

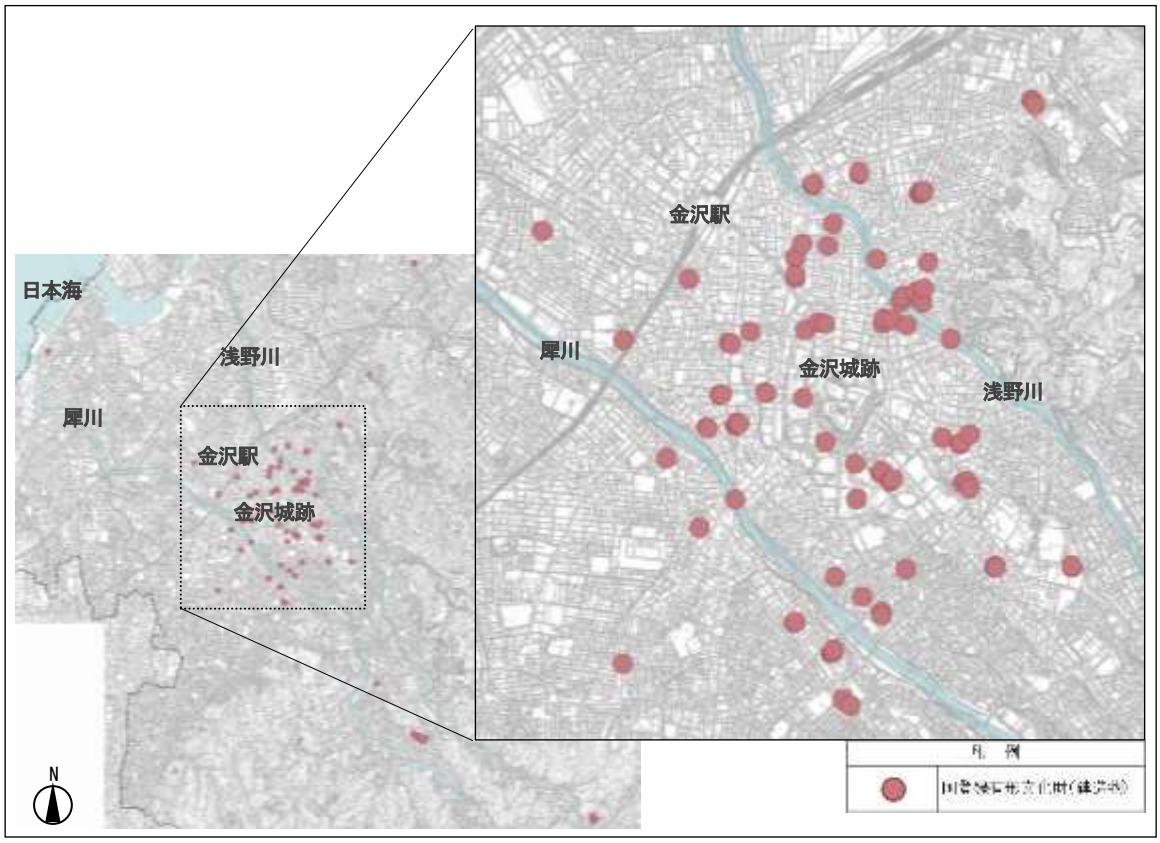
種　別	件　数
伝統的建造物群	4
文化的景観	1

国登録文化財の件数　（令和５年１月時点）

種　別	件　数
有形文化財（建造物）	116
民俗文化財（有形）	1



国指定、選定文化財の分布図



国登録文化財の分布図

（２）石川県指定文化財

国指定、選定文化財以外で歴史遺産として価値の認められるものについて、石川県文化財保護条例に基づく指定文化財として保護を図っており、成巽閣（せいそんかく）辰巳長屋など市内に県指定有形文化財（建造物）22件が指定されている。（近世建造物18件、近代建造物４件）

また、県指定の記念物８件が指定されており、種別は、史跡２件、名勝３件、天然記念物３件である。名勝３件のうち西田家庭園が国指定特別名勝「兼六園」に隣接して位置する。

また、加賀友禅といった県指定無形文化財２件が指定されている。（工芸技術１件、芸能１件）

さらに、加賀鳶梯子登り（かがとびはしごのぼ）など県指定無形民俗文化財２件が指定されているほか、県指定有形民俗文化財１件が指定されている。

有形文化財（建造物）
（成巽閣辰巳長屋）

記念物（名勝）
（西田家庭園）

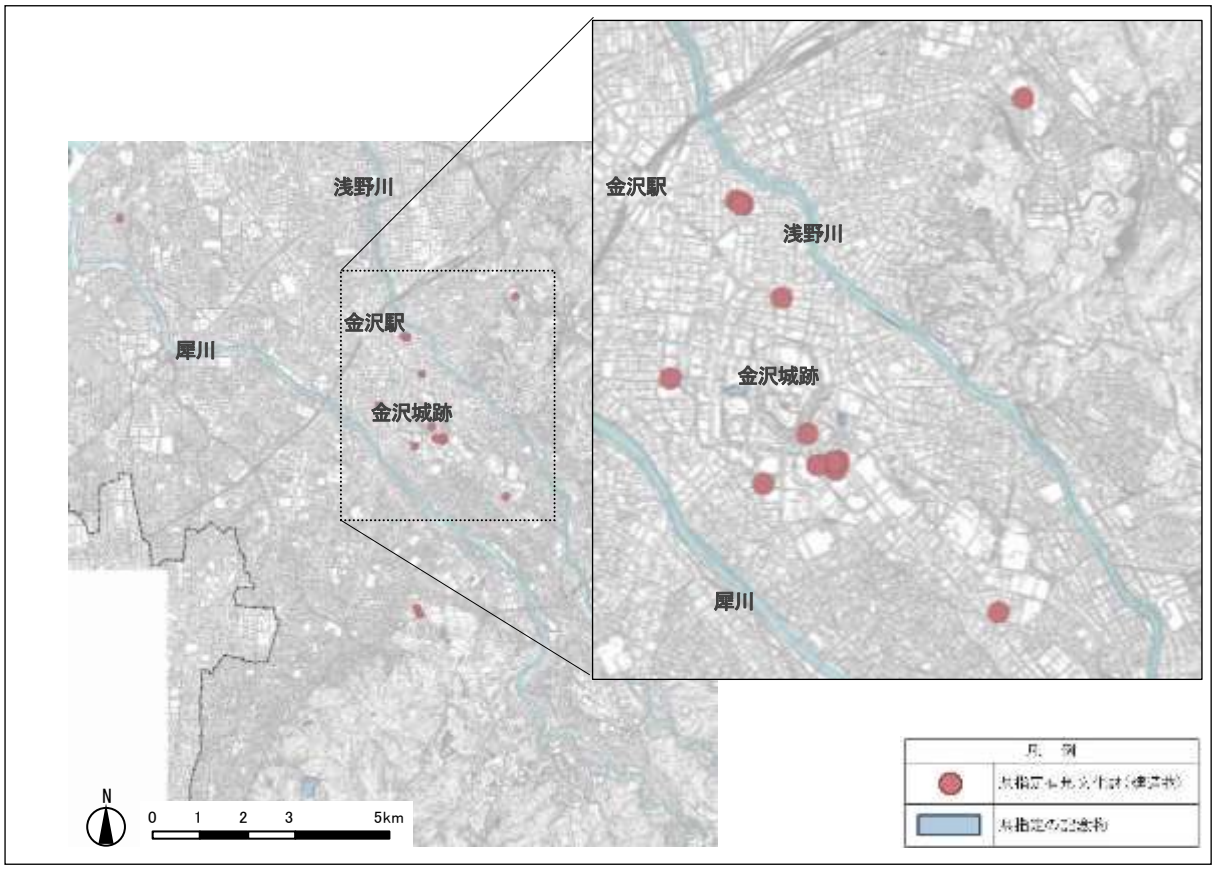
無形文化財（工芸技術）
（加賀友禅）

民俗文化財（無形民俗文化財）
（加賀鳶梯子登り（かがとびはしごのぼ））

県指定文化財の件数　（令和５年１月時点）

種　別		件　数
有形文化財	建造物	22
	美術工芸品	107
無形文化財	工芸技術	1
	芸　能	1
民俗文化財	有形民俗文化財	1
	無形民俗文化財	2
記念物	史　跡	2
	名　勝	3
	天然記念物（※）	3
合　計（件）		142

※は、動物を除く



県指定文化財の分布図

（３）金沢市指定文化財等

市内における歴史的風致に関わる金沢市指定文化財及び市独自条例に基づく建造物の指定件数は下記表のとおりである。

市指定文化財の件数　（令和５年１月時点）

種　別		件　数
有形文化財	建造物	33
	美術工芸品	158
無形文化財	工芸技術	―
	芸　能	2
民俗文化財	有形民俗文化財	4
	無形民俗文化財	11
記念物	史　跡	9
	名　勝	6
	天然記念物（※）	6
合　計（件）		229

※は、動物を除く

市独自条例による保存対象物及び
こまちなみ保存建造物の件数　（令和５年１月時点）

種　別	件　数
保存対象物	39
こまちなみ保存建造物	48

①文化財保護法の体系によるもの

国指定、選定、県指定文化財以外で歴史遺産として価値の認められるものについて、金沢市文化財保護条例に基づく指定文化財として保護を図っており、卯辰山麓寺院群に位置する全性寺山門など市指定有形文化財（建造物）33 件が指定されている。（近世建造物 29 件、近代建造物４件）

また、長町武家屋敷群の中にある西家庭園など、市指定の記念物 21 件が指定されており、種別は、史跡９件、名勝６件、天然記念物６件である。

加えて、加賀宝生など市指定無形文化財２件が指定されている。（芸能２件）さらに、加賀獅子など市指定無形民俗文化財 11 件が指定されているほか、市指定有形民俗文化財４件が指定されている。

有形文化財（建造物）
（全性寺山門）

記念物（名勝）
（西家庭園）

無形文化財（芸能）
（加賀宝生）

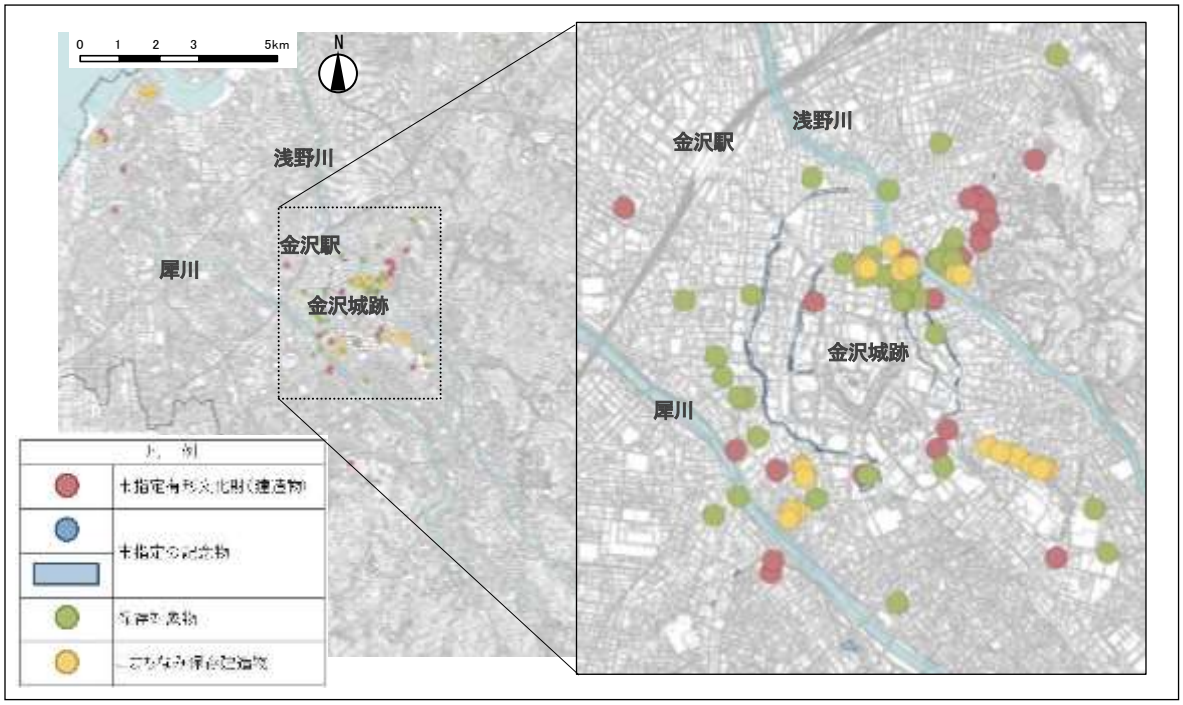
民俗文化財（無形民俗文化財）
（加賀獅子）

②市独自条例によるもの

本市の独自条例に基づく保護措置として、「金沢市における美しい景観のまちづくりに関する条例」（以下「景観条例」という）に基づく「保存対象物」39 件が指定され、「金沢市こまちなみ保存条例」（以下「こまちなみ保存条例」という）に基づく「こまちなみ保存建造物」48 件が登録されている。

保存対象物
（越村邸）

こまちなみ保存建造物
（金丸家住宅）



金沢市指定文化財の分布図

（４）歴史的建造物の分布

旧城下町区域内には、城郭建築や寺社建築、町家、武士系住宅（藩政期の武士住宅を含む）、近代和風住宅など、多様な様式の建築物が現在も多く残っている。

寺院建築は、藩政期に城下町に配置された卯辰山山麓（うたつやまさんろく）、小立野台（こだつの）、寺町台の３地区に集積しており、それぞれが特徴的な景観を持つ寺院群を構成している。

町家と武士系住宅は、それぞれ藩政期に町人、武士が居住していた土地に分布している。

明治期以降に建築された近代和風住宅は最も多く見られ、近代化の影響を受けながら町家と武士系住宅の流れを汲んだ住宅が、それぞれ旧町人地と旧武家地に多く分布している。

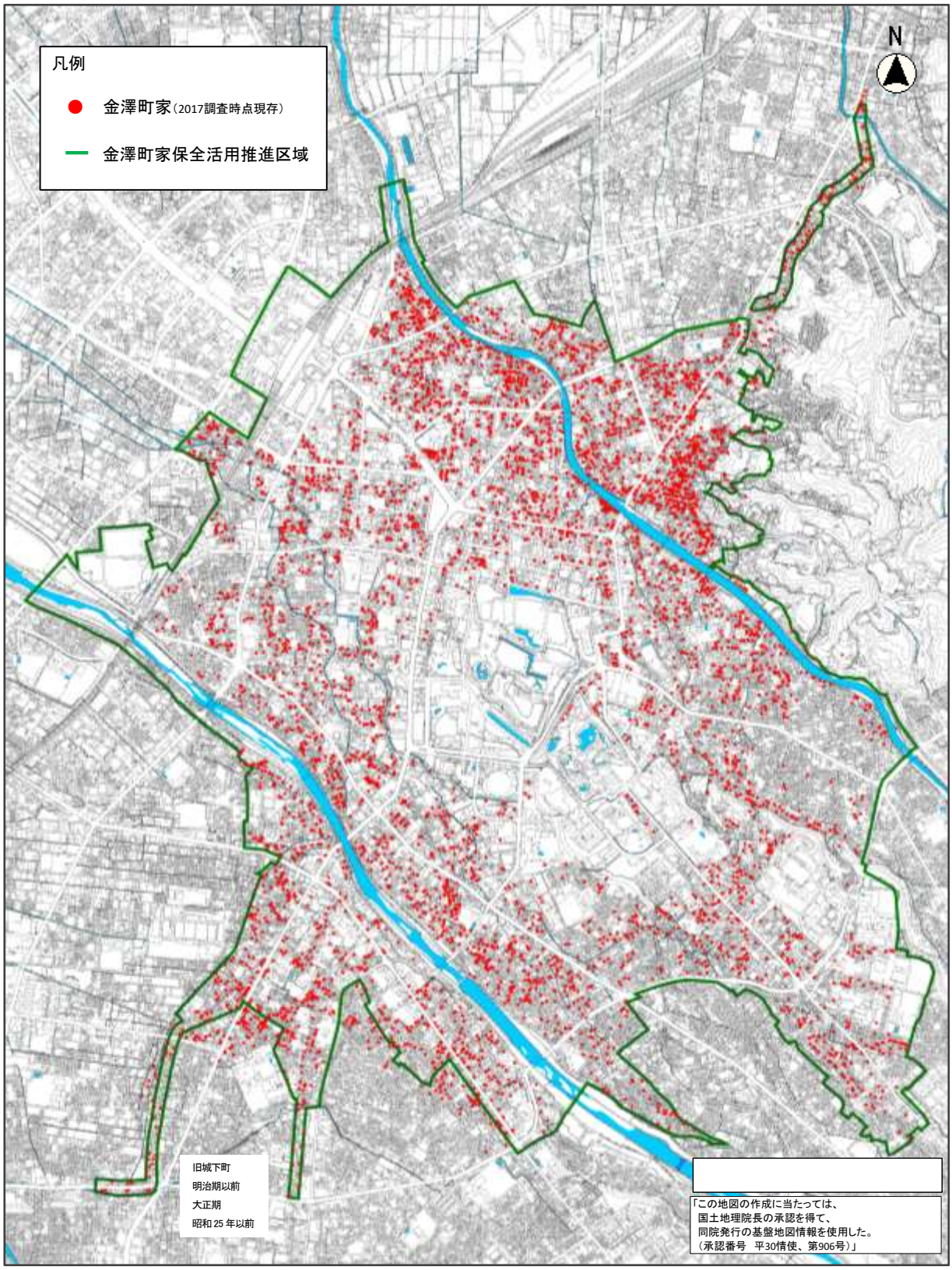
これら町家、武士系住宅、近代和風住宅に代表される「金澤町家」は、近世から昭和 25 年（1950）までに建築されたもので、旧城下町区域を中心として市内に広く約 6,000 棟が残ると推定され、金沢に現存する歴史的建造物の大半を占め、金沢らしい景観の形成に大きく寄与している。

寺院建築（寺町）

町家（尾張町）

武士住宅（彦三町（ひこそまち））

近代和風住宅（橋場町）



旧城下町における金澤町家※の分布

※金澤町家とは、昭和 25 年（1950）以前の木造住宅のうち、町家、武士系住宅、近代和風住宅等の様式を有するもの

また、金沢城跡では各時代、各手法で積まれた様々な石垣を、金沢城公園、兼六園外周部においても重厚に連なる石垣を見ることができるほか、各寺院群（卯辰山山麓寺院群、寺町寺院群、小立野寺院群）、旧武士居住地（長町等）、旧町人居住地（旧北国街道、旧二俣越、尾張町界隈、安江町界隈）、犀川や浅野川沿い、用水や惣構跡の水路護岸等にも石垣を見ることができる。

金沢城・兼六園周辺に見る石垣（尾山神社）

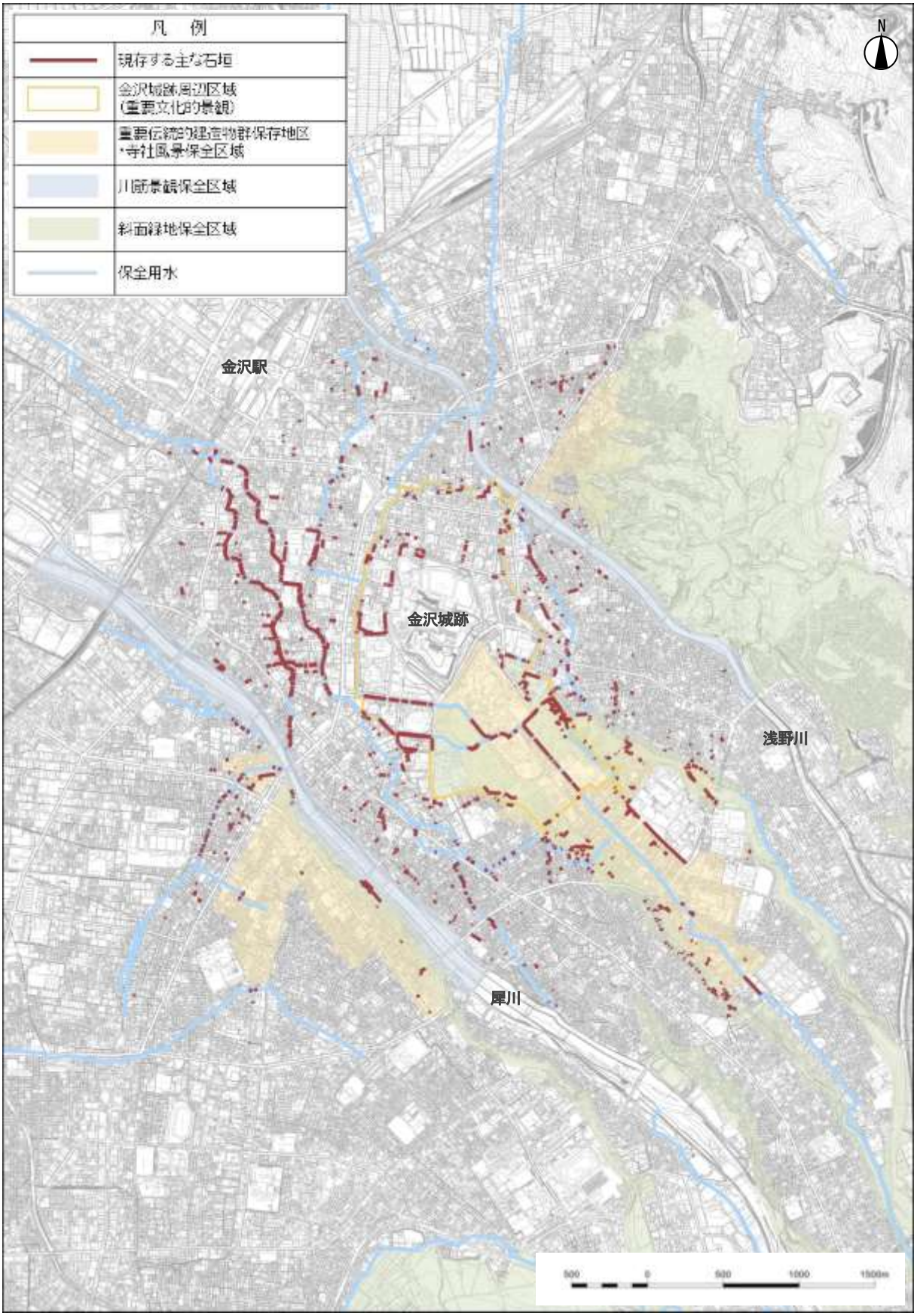
寺院群に見る石垣（小立野寺院群・松山寺）

旧武士・町人居住地に見る石垣（東兼六町）

河川に見る石垣（浅野川）

丘陵・台地に見る石垣（馬坂）

街路・用水に見る石垣（勘太郎川）


凡　例
現存する主な石垣
金沢城跡周辺区域
(重要文化的景観)
重要伝統的建造物群保存地区
・寺社風景保全区域
川筋景観保全区域
斜面緑地保全区域
保全用水
N
金沢駅
金沢城跡
浅野川
犀川
500
0
500
1000
1500m

石垣の分布

（５）伝統文化・伝統産業に関する分布

旧城下町では現在も、伝統文化、伝統産業に関連する店舗や施設が数多く見られる。

茶の湯に関連して、茶室は兼六園周辺に多く分布しているほか、藩政期に有力町人の居住地であった尾張町や大手町界隈（かいわい）にも多く見られ、旧城下町の各所に広く分布している。

和菓子店や料理店は旧北国街道沿道に多く分布しており、呉服店は旧町人居住地に多く分布している。

伝統産業の金箔（きんぱく）工芸については、昭和 40 年代に箔団地が市街地郊外に建設され、関連する多くの人たちが旧城下町から移住したが、現在も東山、森山、山の上町の近辺に箔関連の人たちが居住しており、工芸品の店舗も多い。

加賀友禅や染物に携わる人たちは、主に金沢城跡周辺、河川や用水沿いに居住しており、工房を構えている。東西別院の門前に位置する安江町近辺では、仏壇店の分布が多く見られる。

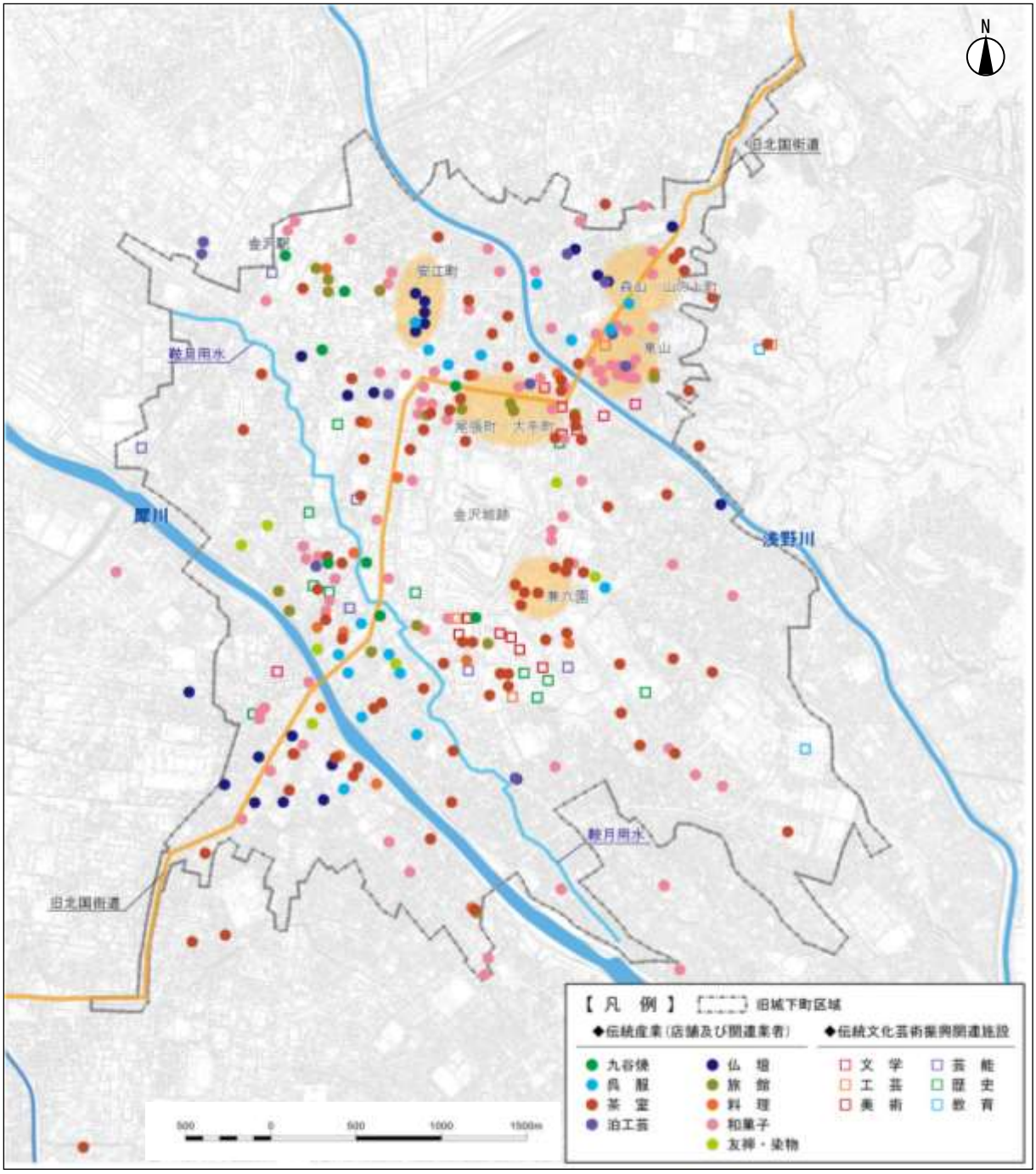
このように、現在も伝統文化や伝統産業に関連する施設は、金沢城跡や兼六園の周辺に集中しているほか、旧城下町のゆかりのある場所に点在している。

茶室を設けた町家（尾張町）

料理店（尾張町）

金箔（きんぱく）工芸施設（東山）

染物店（犀川（さいがわ）沿い）



伝統文化・伝統産業の分布図